

長岡京右京一条四坊十五町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京一条四坊十五町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路新設工事に伴う長岡京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

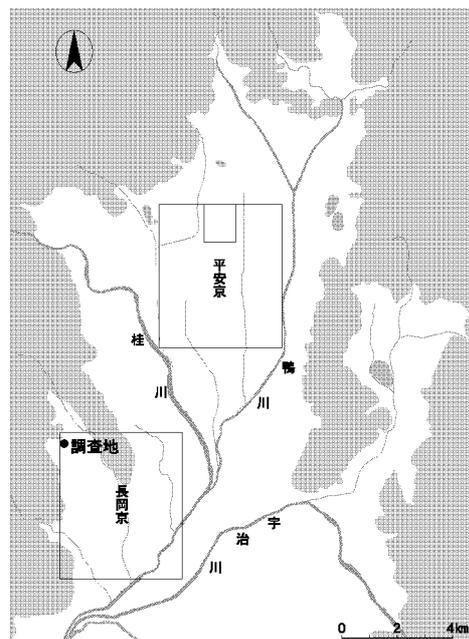
平成17年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京一条四坊十五町跡
長岡京右京831次調査 (7AG-UAR01地区)
- 2 調査所在地 京都市西京区大原野石見町314番地ほか
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2004年11月19日～2005年2月9日
- 5 調査面積 1,943m²
- 6 調査担当者 南 孝雄・清藤玲子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500)「石見」「粟生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系 (改正前) 平面直角座標系 (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点 (一級基準点) を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 発掘調査中はトレンチごとに通し番号を付し、遺構の種類を前につけた。本報告では紛らわしさを避けるため、1 トレンチは1000番台、2 トレンチは2000番台、3 トレンチは3000番台とした。建物・柵などは各遺構ごとに通し番号を付した。
- 13 遺 物 番 号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子・担当調査員
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 南 孝雄・清藤玲子
- 17 編集・調整 児玉光世・大立目 一



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	3
(1) 調査区の設定と基本層序	3
(2) 遺構の概要	4
(3) 1 トレンチ	5
1) 古墳時代から長岡京期の遺構	5
2) 鎌倉時代から室町時代の遺構	9
3) 江戸時代の遺構	10
(4) 2 トレンチ	10
1) 縄文時代から古墳時代の遺構	10
2) 鎌倉時代から室町時代の遺構	11
3) 江戸時代の遺構	16
(5) 3 トレンチ	17
1) 鎌倉時代の遺構	17
(6) 4 トレンチ	19
3 . 遺 物	20
(1) 縄文時代から古墳時代の遺物	20
(2) 鎌倉時代から室町時代の遺物	21
4 . ま と め	29
(1) 長岡京期の遺構の有無について	29
(2) 中世の遺構の変遷について	29

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 トレンチ	第 1 面全景 (北から)
		2	1 トレンチ	柵 1 (北東から)
図版 2	遺構	1	1 トレンチ	門 2 ・ 柵 2 (北から)
		2	1 トレンチ	土壇 1220 (東から)
		3	1 トレンチ	土壇 1095 (北から)
図版 3	遺構	1	1 トレンチ	建物 1 ・ 2 (北から)
		2	1 トレンチ	溝 1700 (北から)

- 図版 4 遺構 1 2トレンチ 第1面全景(北から)
 2 2トレンチ 土壌2380(北から)
 3 2トレンチ 井戸2244断割り断面(南から)
- 図版 5 遺構 1 2トレンチ 階段状遺構1と土塁状遺構1(南西から)
 2 2トレンチ 階段状遺構1(西から)
- 図版 6 遺構 1 2トレンチ 竪穴住居1(北西から)
 2 2トレンチ 建物4(北東から)
 3 2トレンチ 溝2808(東から)
- 図版 7 遺構 1 3トレンチ 全景(北から)
 2 3トレンチ 川3001と土器溜3007(北東から)
- 図版 8 遺構 1 3トレンチ 土器溜3007(北東から)
 2 3トレンチ 井戸3005(北東から)
 3 4トレンチ 全景(北から)
- 図版 9 遺物 土器溜3007出土土器
- 図版10 遺物 出土土器・石製品

挿 図 目 次

図 1	長岡京と調査地点図(1:50,000)	1
図 2	調査地位置図(1:5,000)	2
図 3	調査区配置図(1:1,000)	3
図 4	調査区南北断面模式柱状図(深さ1:50)	3
図 5	調査前風景(南から)	4
図 6	作業風景(南から)	4
図 7	長岡京期以前の流路跡概略図(1:600)	4
図 8	建物1・2実測図(1:100)	5
図 9	1・4トレンチ第2面実測図(1:200)	6
図10	1・4トレンチ第1面実測図(1:200)	7
図11	門1・柵1実測図(1:100)	8
図12	門2・柵2実測図(1:100)	8
図13	土壌1095実測図(1:20)	9
図14	土壌1220実測図(1:20)	9
図15	竪穴住居1実測図(1:100)	10
図16	2トレンチ第2面実測図(1:200)	11

図17	2 トレンチ第1面実測図(1:200)	12
図18	階段状遺構1実測図(1:100)	14
図19	土塁状遺構1断面図(1:80)	14
図20	井戸2244実測図(1:60)	15
図21	土壙2015実測図(1:40)	15
図22	便所遺構2754実測図(1:50)	16
図23	井戸3005実測図(1:60)	17
図24	3 トレンチ実測図(1:200)	18
図25	川3001東西断面図(1:60)	19
図26	縄文土器拓影・実測図(1:2)	20
図27	石器実測図(1:2)	20
図28	溝1691・2808出土土器実測図(1:4)	21
図29	竪穴住居2、溝1700出土土器実測図(1:4)	21
図30	土器溜3007出土土器実測図(1:4)	22
図31	土器溜3007出土土器実測図(1:8)	23
図32	土壙2078出土土器実測図(1:4)	24
図33	土壙2078出土土器実測図(1:8)	25
図34	土壙1668・1693・2373・2380、溝2001、階段状遺構1出土土器実測図(1:4) ...	26
図35	土壙2072・2438・2241、井戸2244出土土器実測図(1:4)	27
図36	土器溜3007出土石製品実測図(1:4)	28
図37	井戸3005から階段状遺構1実測図(1:120)	30
図38	遺構変遷模式図(1:600)	31
図39	調査区および石見城地形測量図(1:800)	33

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	23

長岡京右京一条四坊十五町跡

1. 調査経過

今回の発掘調査は、京都市建設局街路部街路建設課による都市計画道路中山石見線の建設に先立って実施した第3次調査である。調査は、長岡京右京831次調査にあたり、長岡京期の遺構の有無、これ以降の土地利用の在り方、また長岡京以前の遺構の広がりを明らかにするために実施したものである。

2002年度に今調査地の南側で、右京746次調査が行われた¹⁾。この調査では、一条条間南小路が発見され、これまでの長岡京右京域での最も北西の条坊遺構の発見となった。また、鎌倉時代には集落が成立し、現在の石見集落の直接の起源であることも明らかとなった。

今回の調査地は、長岡京右京一条四坊十五町にあたり、対象地の南端では一条条間大路推定地

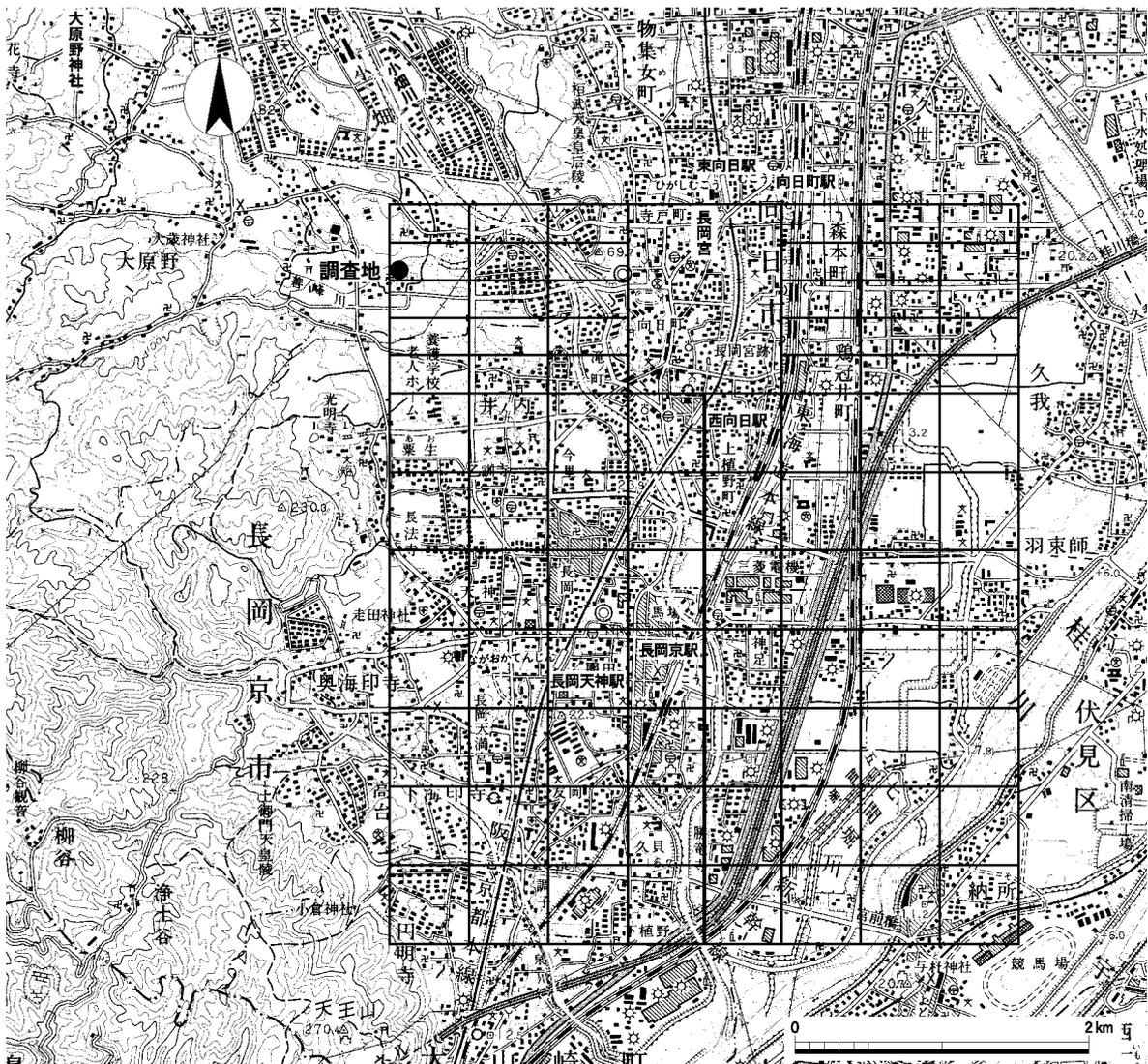


図1 長岡京と調査地点図(1:50,000)

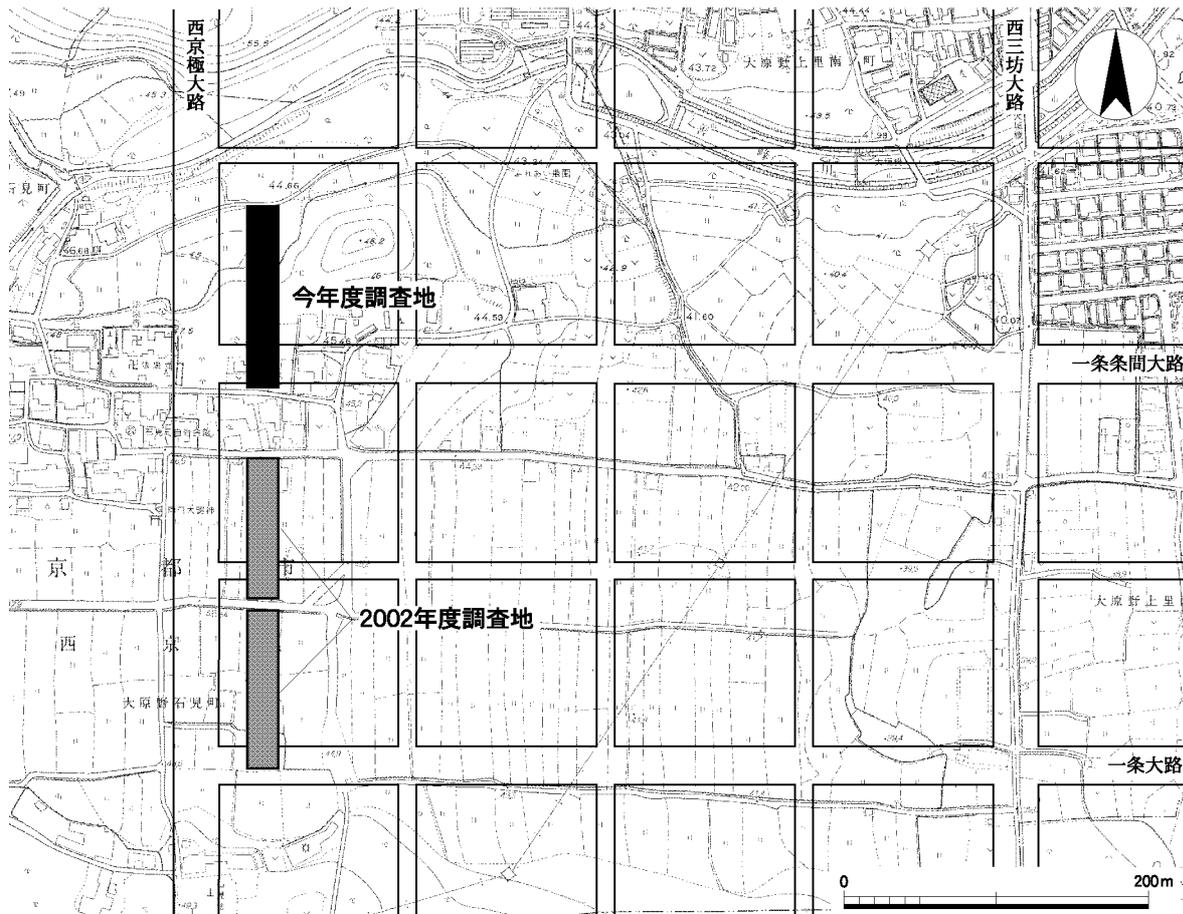


図2 調査地位置図(1:5,000)

を含み、これらの検出が期待された。また、乙訓地域では大規模な調査は水田部分を対象とする事が多いが、今回の調査は集落内のまとまった面積を対象とする事となり、集落の変遷を知る貴重な機会であり、その成果が期待された。特に室町時代と考えられる石見城跡が調査地の東側に隣接しており、これとの関連の解明も調査の主目的となっていた。

調査の結果、一条条間大路北築地推定地において条坊遺構を検出する事はできなかった。ただし、長岡京期と考えられる南北棟の掘立柱建物が検出でき、当該時期に何らかの土地利用は存在したと思われる。中世の柱穴はきわめて多数を検出した。これに伴って2トレンチの段丘斜面では、鎌倉時代の階段状遺構を確認した。3トレンチでは、同時期の川跡とその右岸で廃棄された大量の瓦器を中心とする土器が検出された。調査地東側に隣接する石見城跡との関連も問題となったため、調査と併行して、その測量調査も行った。

なお、調査中、平成17年1月29日には、鎌倉時代の階段状遺構、多量の土器などが良好な状態で検出できたため、地元向けの現地説明会を行った。

註

- 1) 百瀬正恒・網 伸也『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年

2. 遺 構

(1) 調査区の設定と基本層序 (図3・4)

調査地は、善峰川右岸の標高46.0mの低位段丘上と標高44.5mの氾濫源とにまたがる。この段丘上に1・2・4の各トレンチを設定し、氾濫源部分に3トレンチを設定し、1トレンチから順に調査を行った。段丘上の地形は北から南にわずかに傾斜するがほぼ平坦である。2トレンチ北側は比高差1.5mの段丘斜面となる。1トレンチと2トレンチは共に段丘上の調査であり、中世を中心とする多数の遺構を検出した。

基本層序(図4)は、1・4トレンチでは、現地表面から-0.25mまでが現代の盛土層(-1層)、-0.5mまでが旧耕作土層(-1層)、-0.6~0.9mが中世の遺構面となる古墳時代遺物包含層(-1層)、これ以下が地山で礫を含むにぶい黄褐色砂泥層(-1層)となる。

2トレンチは、現地表面から-0.3mが竹藪盛土層(-2層)、-0.4mが旧耕作土層(-2層)、-0.5mが中世の遺構面となる古墳時代遺物包含層(-2層)で、これ以下がにぶい黄褐色土層(-2層)の地山となる。

3トレンチは、現地表面から-0.1mまでが水田耕作土層(-3層)、-0.25mまでが旧耕作土層(-3層)、-0.4mまでが中世遺物を含む堆積土層(-3層)、これ以下が10cm以上の礫を多量に含む砂礫層(-3層)となる。

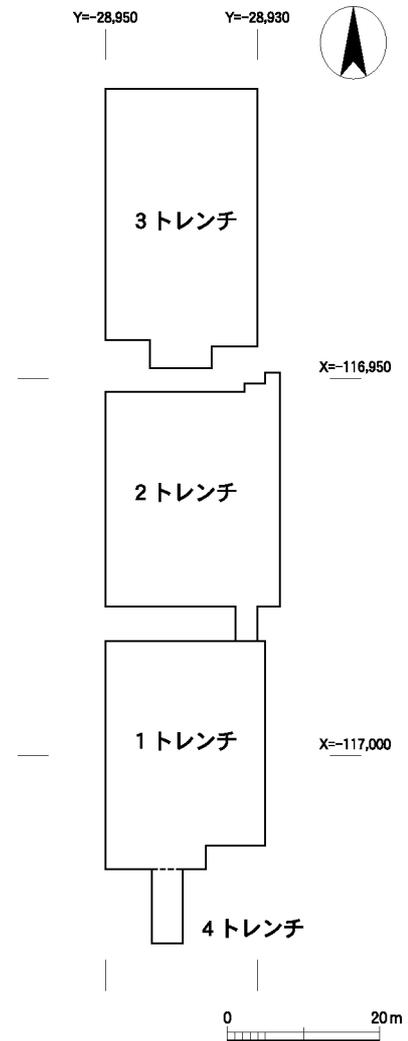


図3 調査区配置図(1:1,000)

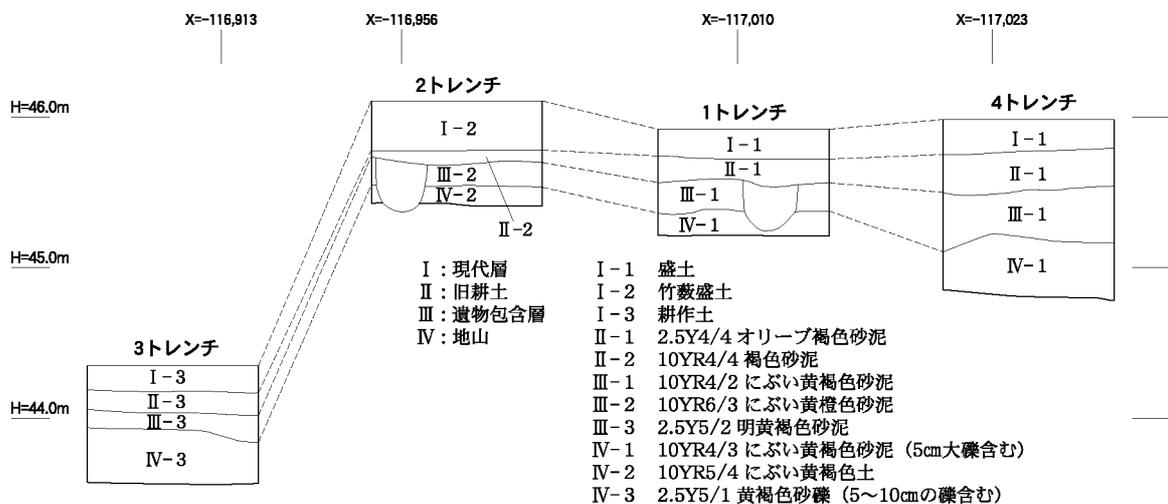


図4 調査区南北断面模式柱状図(深さ1:50)



図5 調査前風景（南から）



図6 作業風景（南から）

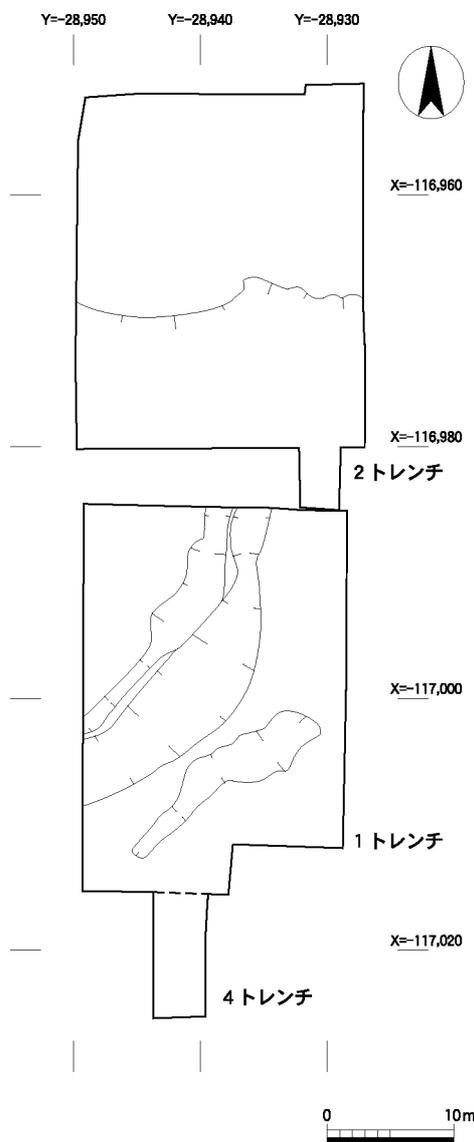


図7 長岡京期以前の流路跡概略図（1：600）

（2）遺構の概要

調査地は長岡京右京一条四坊十五町にあたり、一条条間大路が1トレンチ南部から4トレンチにまたがって検出することが予想されていたが、確認する事はできなかった。長岡京期の可能性がある遺構として、1トレンチで掘立柱建物が検出されたのみであり、この時期の遺物の出土も極めて少ない。

遺構の中心は、鎌倉時代から室町時代であり、1800基あまり検出された遺構の大半が、この時期の柱穴である。特に2トレンチにおいて遺構密度が高く、段丘斜面では階段状遺構が検出された。室町時代に造られたと思われる石見城跡が調査地の東側に隣接する。

長岡京期以前の遺構として、1トレンチ北半から2トレンチ南半にかけて南西から北東方向の流路跡を確認した（図7）。この流路は部分的な断割り調査しか行っていないため詳細は不明であるが、流路の最上層からは古墳時代初頭の土器が出土している。また、2トレンチで検出した6世紀の竪穴住居の北半は段丘崖面となって失われており、現在の段丘面が古墳時代以降に形成された事がわかる。この他に縄文時代晩期の土壌、古墳時代前期・後期の竪穴住居、古墳時代後期の周溝墓状遺構を検出している。

以下に検出した遺構についてトレンチごとに時代順に概述する。

(3) 1トレンチ(図8~14、図版1~3)

1) 古墳時代から長岡京期の遺構(図9)

溝1700 調査区南東部で検出したL字型に曲がる溝。溝一辺の長さは約5m。幅0.3~0.7m、深さ0.2~0.4mを測り、コーナー部が最も深い。調査区外に延びるため全容は不明である。TK10¹⁾型式の須恵器杯・蓋が出土した。低墳丘の古墳の可能性がある。

建物1(図8) 2間×2間の総柱建物。柱間は1.7~1.9mと不等間である。北に対してやや東に傾く。柱掘形は0.5~0.6mの隅丸方形。柱痕跡は径0.2m。残存している柱穴の深さは0.1~0.2m。

建物2(図8) 2間×3間の南北棟建物。柱間は梁行が2.1m、桁行が1.8m。柱掘形は0.5m×0.7mの長方形を呈するものが多い。柱痕跡は径0.2m。残存している柱穴の深さは0.2m。

建物1・2は、時期を決定できる遺物の出土はほとんど無いが、周辺から8世紀代の須恵器の小片が出土していることと建物方位が正方位に近い事から、ここでは奈良時代から長岡京期の可能性を指摘しておく。



図8 建物1・2実測図(1:100)

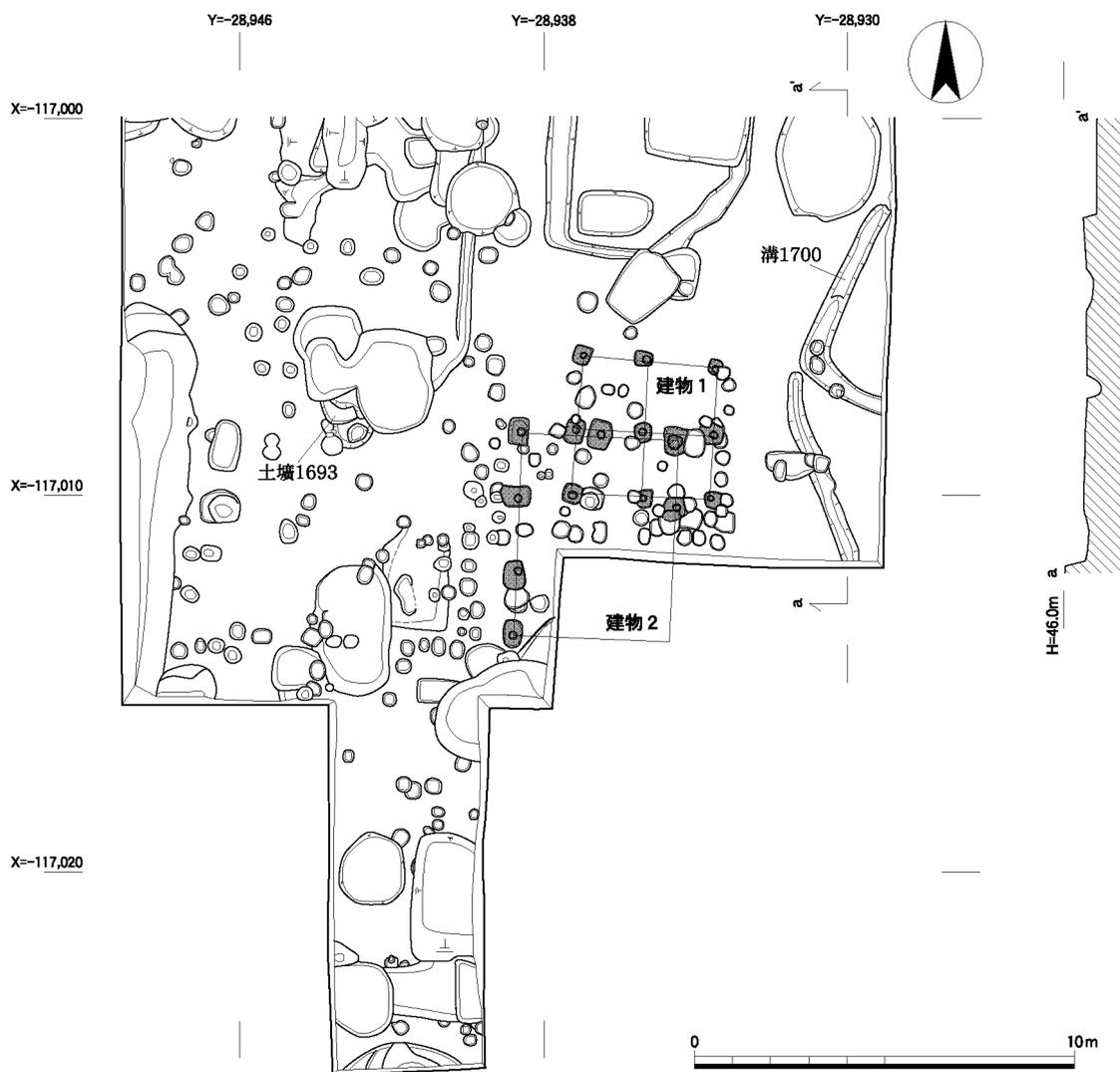


図9 1・4トレンチ第2面実測図(1:200)

表1 遺構概要表

地区	検出面	時期	主要遺構
1トレンチ	第2面	古墳時代後期～長岡京期	建物1・2、溝1700
	第1面	鎌倉時代～室町時代	門1・2、柵1・2、濠1072、土壌1095・1220・1693
		江戸時代	建物3、土間1、カマド1
2トレンチ	第2面	縄文時代～古墳時代後期	建物4、竪穴住居1・2、溝2808、土壌2926
	第1面	鎌倉時代～室町時代	建物5～13、柵3～8、階段状遺構1、土塁状遺構1、井戸2066・2244、溝2001・2050・2053、土壌2015・2078・2373・2380・2438
		江戸時代	溝2329、土壌2384、便所遺構2754
3トレンチ		鎌倉時代	井戸3005、土器溜3007、川3001、溝3003
4トレンチ		鎌倉時代～江戸時代	土壌

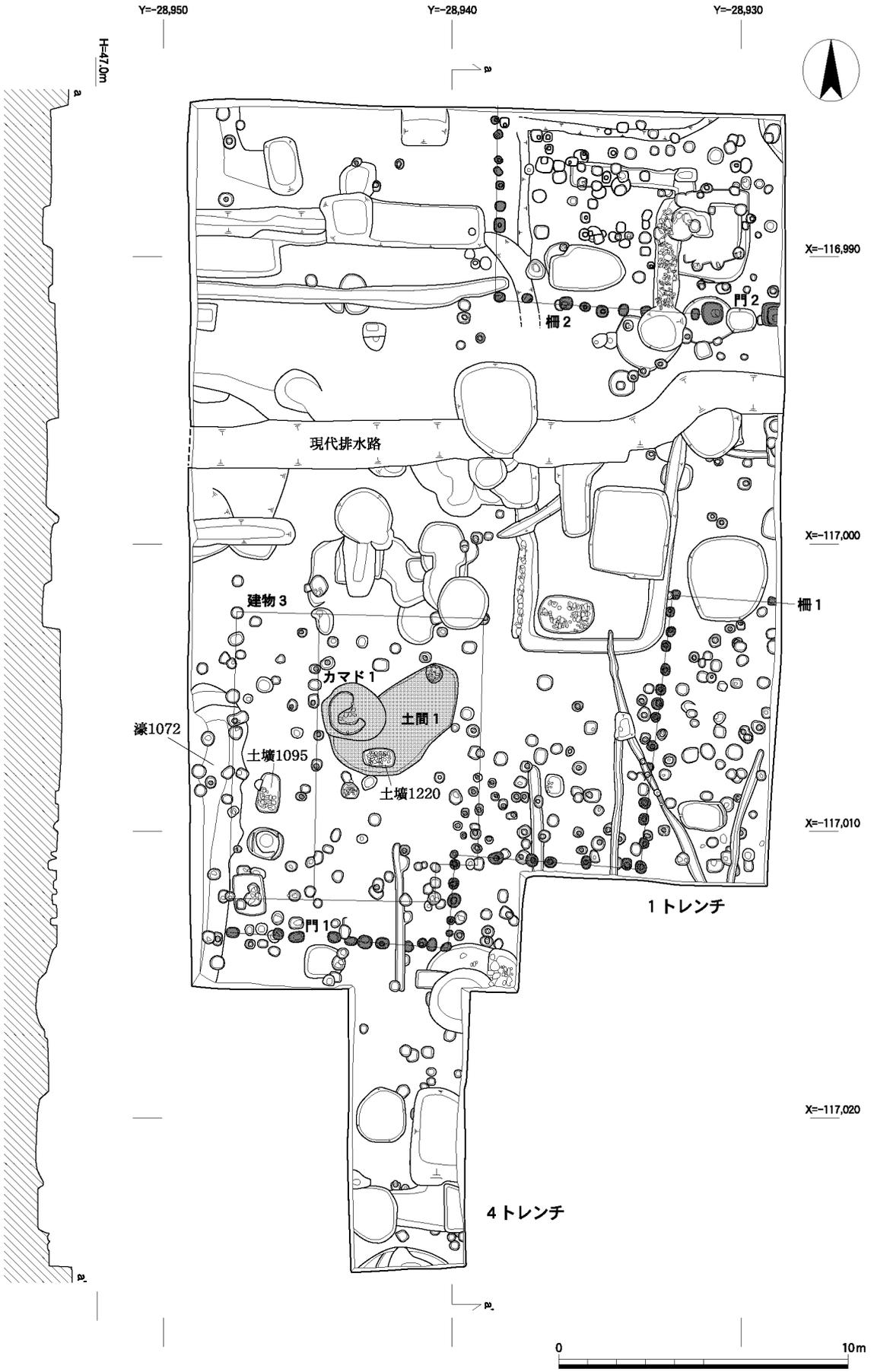


図10 1・4トレンチ第1面実測図(1:200)

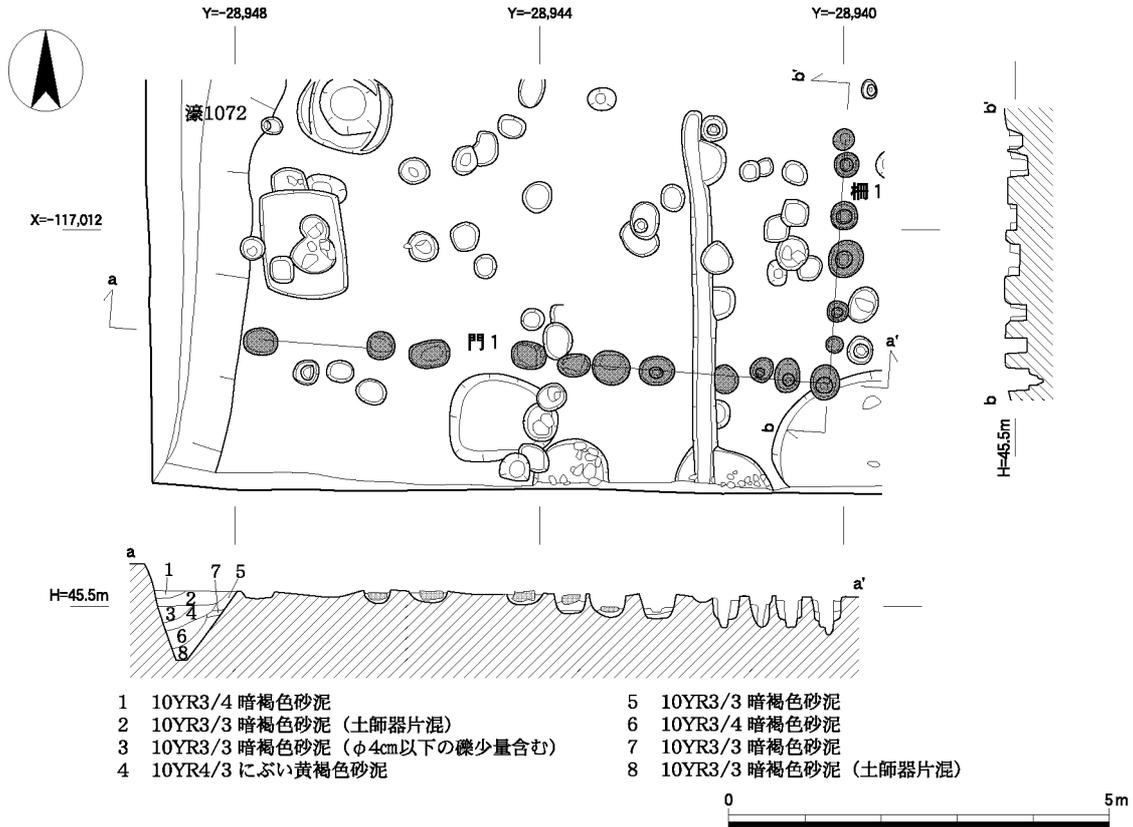


図11 門1・柵1実測図(1:100)

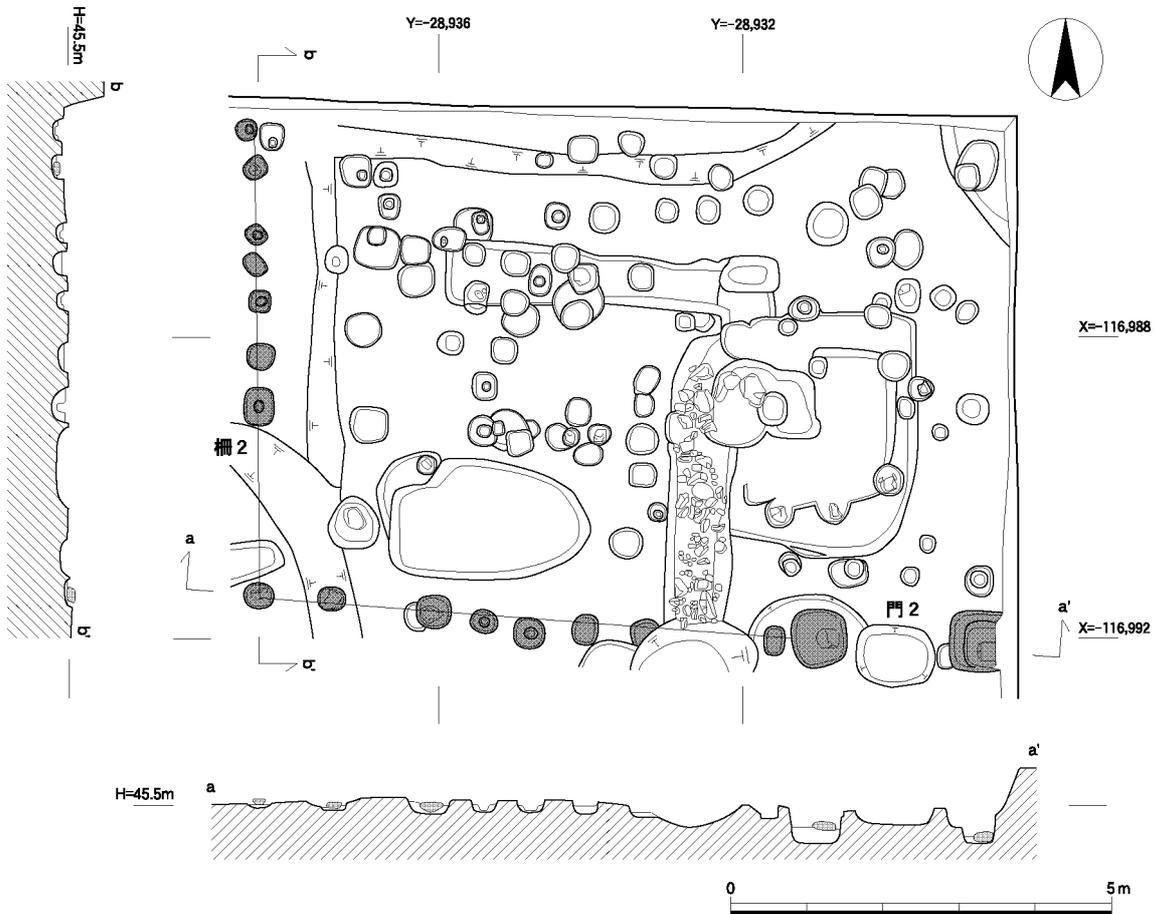


図12 門2・柵2実測図(1:100)

2) 鎌倉時代から室町時代の遺構 (図10)

濠1072 調査区南西部で検出した濠状遺構。北に対してやや東に振る。検出長約10m、南は調査区外へ延びるが、北端は確認している。深さは北端で0.6m、南壁際で0.9mを測る。幅は、西肩が調査区外のため正確には不明であるが、北端の調査区西壁際では濠西肩部に向かう上がりを確認した。この部分での濠幅は1.8m程度と思われる。埋土は基本的には土で埋まっており、粘土や砂など、水が流れた痕跡は無かった。溝内からは16世紀の土師器などが出土した。

門1 (図11) 濠1072の東側で検出した。遺構面に露出して、東西に礎石が4つ並ぶ。柱間は西から0.65m、1.3m、0.65mを測る。礎石は0.25~0.3m x 0.2~0.25m。礎石据付穴の掘形径は0.3~0.5m x 0.25~0.35mとバラつきがあり、礎石・掘形共に中の2つが両端よりも大きい。掘形の深さは0.1~0.3m。

柵1 (図11) 門1に取り付く掘立柱塀。鉤の手状に曲がりながら北東へと伸びていく。柱掘形0.2~0.4mの円形。残存している柱穴の深さは、南側の柱列で深く0.4~0.5m、その他は0.2~0.3mで北に行くほど浅くなる。柵の南側で比較的多くの柱穴を検出しており、屋敷地の北限となる施設と思われる。南側の柱列は門1と共に、濠1072と直交関係にあり、同時期と考えられる。

門2 (図12) 調査区北東部で検出した門。礎石は掘形内に収まる。柱間は2.1m。礎石は0.3m x 0.3mで方形に近い。礎石据付穴の掘形径は0.8m x 0.8mの隅丸方形。掘形の深さは0.5m。

柵2 (図12) 門2に取り付く掘立柱塀。柱掘形は0.2~0.4mとバラつきがある。残存している柱穴の深さは0.1~0.3m。

土壌1095 (図13) 1.3m x 0.7mの南北に長辺のある土壌。深さは約0.3m。土壌の南半は一段下が

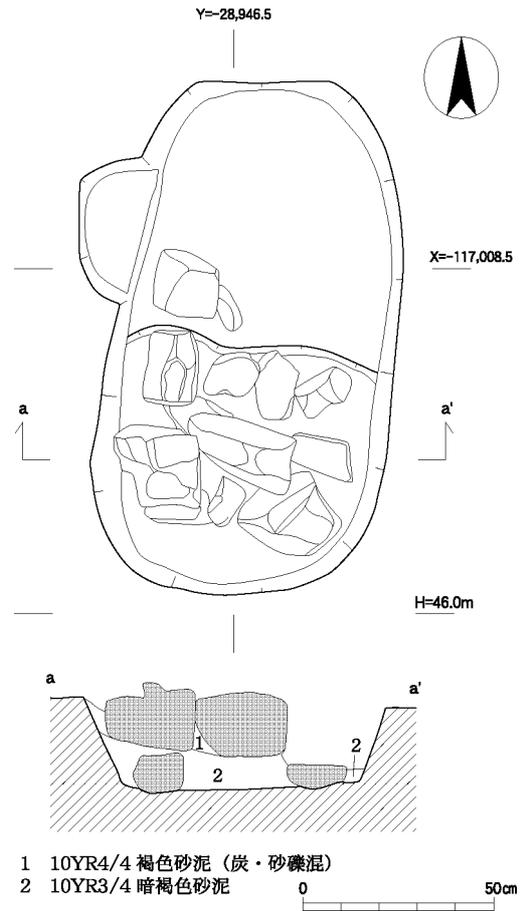


図13 土壌1095実測図 (1:20)

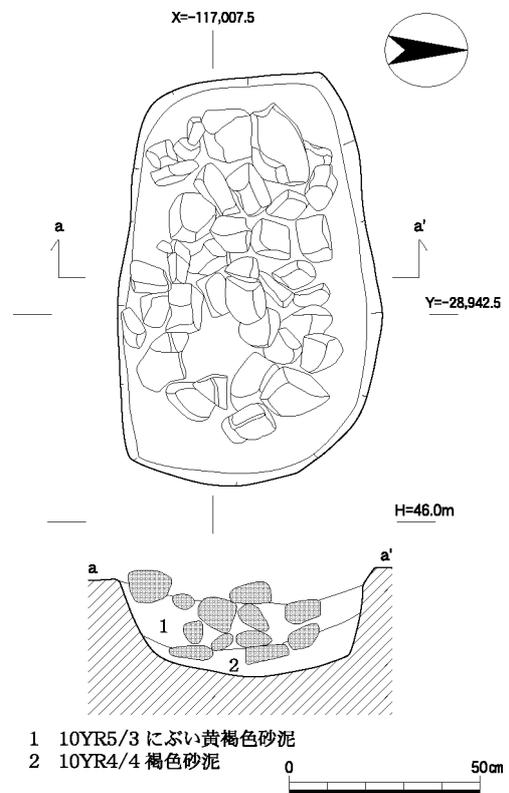


図14 土壌1220実測図 (1:20)

り、石を入れる。石は上下2段に分かれ、上部の石の大きさは0.3m、下部の石は0.1m程度とやや小さい。埋土は基本的に2層で、上層はわずかに炭を含む褐色砂泥層で、下層は暗褐色砂泥層である。遺物は、白色系のへそ皿などが少量出土した。

土壌1220(図14) 1.1m×0.7mの東西に長辺のある土壌。深さは約0.2m。0.1~0.3mの礫を多量に含む。埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄褐色砂泥層で、下層褐色砂泥層である。遺物は瓦器椀、土師器皿などが出土した。

土壌1693 後述するカマド1の下層で検出した。0.7m×0.7mの方形を呈するが、北部と東部が他の土壌によって攪乱されているため、本来の規模は不明である。深さは約0.3m。

3) 江戸時代の遺構(図10)

建物3 南北10m、東西8.6m。西の柱列は濠1072の埋土の上に成立する。側柱の柱掘形は0.3~0.4m、深さは0.2~0.3mを測り、柱痕跡の無いものも多く、0.2mほどの礎石を据え付けたものもある。内側の柱穴は0.3m、深さは0.3m、残存している柱穴には柱痕跡がある。これらから建物3は、礎石建ち建物の可能性が考えられ、束柱には掘立柱を用いていたようである。

土間1 建物3の北東部で、5.0m×2.0mで楕円形に残って検出した。非常に細かい粒子の灰色砂で構築される。厚さ3cm。土間構築土より伊万里染付が出土した。

カマド1 土間1の上で検出した。1.2m×1.0mで黄褐色土が馬蹄形にめぐる。内側基底には、構築土裾部を押さえる為の0.1~0.2mの石が並べられている。

(4) 2 トレンチ(図15~22、図版4~6)

1) 縄文時代から古墳時代の遺構(図16)

土壌2926 調査区北半で検出した隅丸方形の土壌。径1.3m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色土。縄文時代晩期の深鉢の細片が出土し、口縁部の形状からみて2個体はあることが分かる。

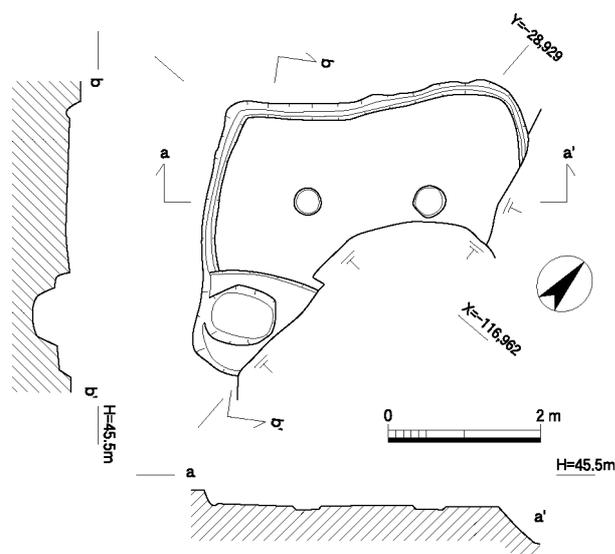


図15 竪穴住居1実測図(1:100)

建物4 調査区北東部で検出した掘立柱建物。南北4.5m2間分を検出した。柱間は2.25m。柱掘形0.9~1.1mを測る。柱穴の残存している柱穴の深さは0.6m。北に対して東へ25°傾く。中央の柱穴から6世紀末の須恵器の小片が出土した。

竪穴住居1(図15) 調査区東部の壁際に検出した。室町時代の井戸2066によって東部を切られる。北に対して東へ40°の傾きを持つ。幅4.0m×3.7m。支柱穴が2基確認できた。南西隅近くに掘形が隅丸方形の貯蔵穴を持ち、幅1.0m×0.8m、深さ0.2

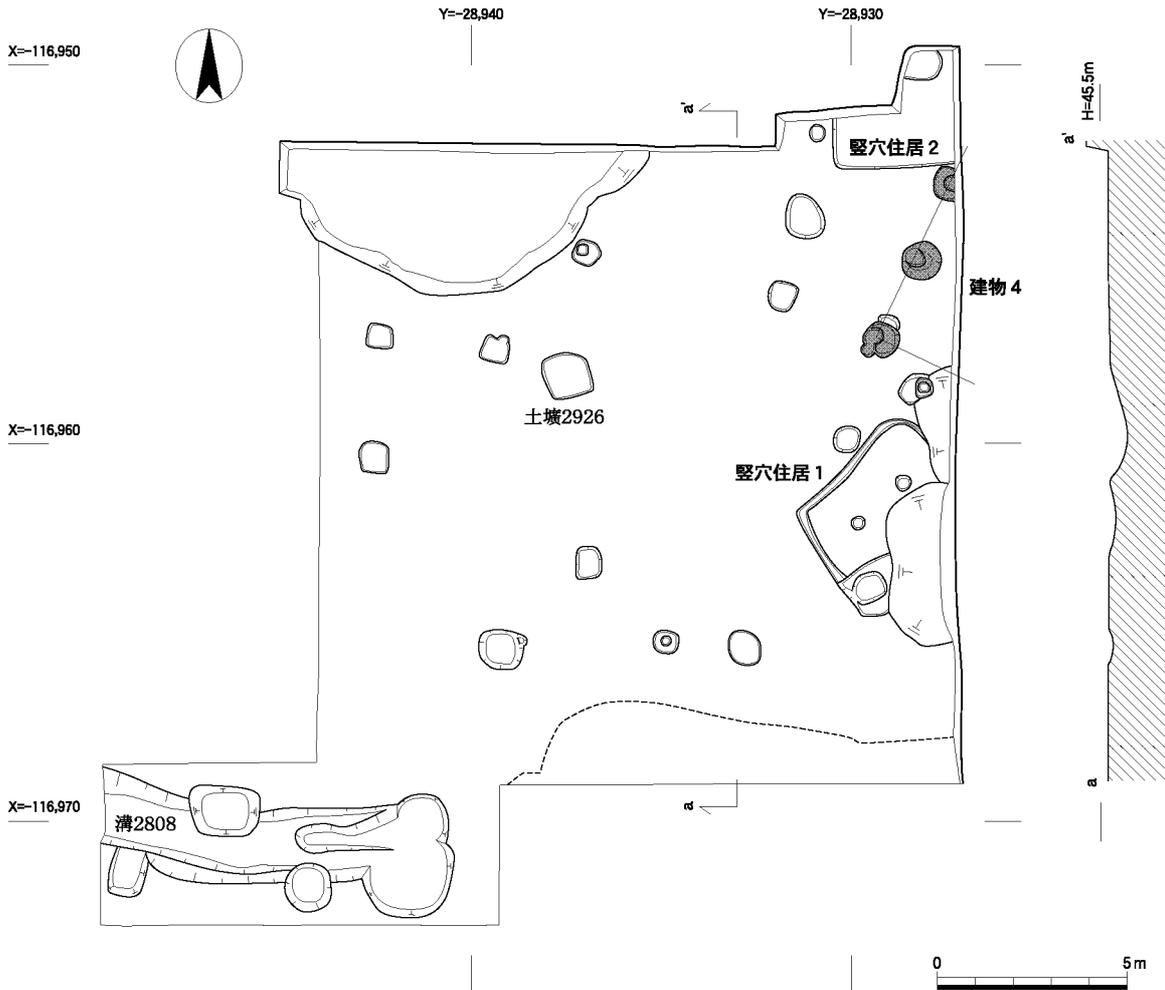


図16 2トレンチ第2面実測図(1:200)

mを測る。貯蔵穴部分を除き、壁沿いに断面U字形の壁溝が巡る。遺物は土師器の小片が出土し、時期は決定しがたいが古墳時代前期と思われる。

竪穴住居2 調査区北東部の壁際で検出した。ほぼ正方位に近い。東西3.1m以上、南北1.4m以上。調査区の北壁際で焼土を検出しており、カマドあるいは炉が存在したと思われる。TK10型式の須恵器杯蓋が出土した。

溝2808 調査区南西部で検出した。幅1.5~2.0m、深さは西側で0.3m、東側で0.4mを測る。西側は調査区外へ延び、東端は近世の土壌2376に切られるあたりで不明瞭に終わる。古墳時代前期の土師器が出土した。

2) 鎌倉時代から室町時代の遺構(図17)

建物5 調査区北東部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北6.6m、東西7.6m以上。柱間は不等間で1.6~1.9m。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.2~0.4mの円形。残存している柱穴の深さは0.4m。建物南西部は土壌2078を避けるように建物を配置している。建物北側は南北0.6mの縁と思われる張り出しを持つ。建物の傾きはほぼ正方位に近い。

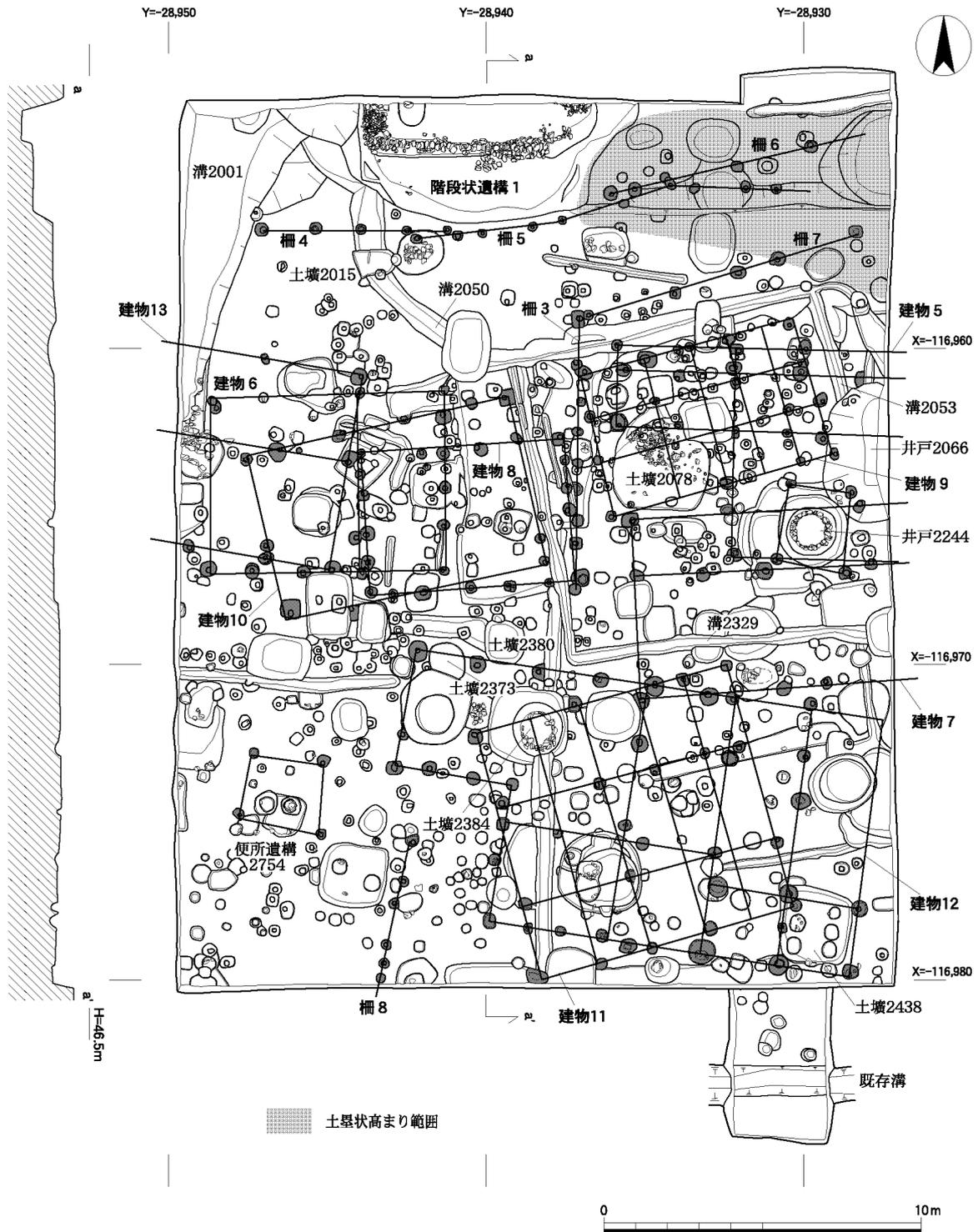


図17 2トレンチ第1面実測図(1:200)

建物6 調査区北西部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北5.6m、東西7.2m。建物の傾きはほぼ正方位に近い。

建物7 調査区東部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北4.5m、東西6.6m。柱間は不等間0.6~1.8m。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.2~0.4mの円形。残存している柱穴の深さは0.2~0.3m。建物の振れは北に対して西へ約10°である。

建物8 調査区西部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北4.5m、東西6.5m。柱間は不等間で0.5～1.5m。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.3～0.5mの円形。建物の振れは北に対して西へ約8°である。

建物9 調査区北東部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北4.6m、東西7.0m。柱間は不等間で1.2～1.5m。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.3～0.5mの円形。建物の振れは北に対して西へ約13°である。

建物10 調査区西部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北5.4m、東西8.2m。柱間は不等間で1.2～2.0m。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.3～0.5mの円形。建物の振れは北に対して西へ約13°である。

建物11 調査区南東部で検出した東西棟の掘立柱建物。南北8.0m、東西8.0m。柱間は不等間で1.5～2.4m。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.3～0.5mの円形。建物の振れは北に対して西へ約13°である。

建物12 調査区南東部で検出した東西棟建物で、南西の一角を欠く平面形を呈する。南北8m、東西15m。柱間は不等間で1.0～2.4mであるが、側柱には2.4mが多い。柱筋は必ずしも通らないが総柱建物と考えられる。柱掘形0.4～0.8mの円形でやや大型のものが多く、根石を持つものもある。建物の振れは北に対して東へ9°である。

建物13 調査区北西部で検出した掘立柱建物。南北6m、東西4.5m以上の東西棟と思われる。柱間は不等間で1.5～2.1m。柱掘形は0.4～0.6m。建物振れは北に対して東へ9°である。

柵3 調査区中央で検出した南北方向の柵。南北9m。柱間は1.2～2.4m。

柵4 調査区北西部で検出した東西方向の柵。東西5.8m。柱間は1.2～1.5m。柱掘形は0.2～0.4m。

柵5 調査区北部で検出したやや屈曲する東西方向の柵。東西約11m。柱間は0.6～2.0m。柱掘形は0.3m。

柵6 調査区北東部で検出した東西方向の柵。東西6.5m以上。柱間は0.8～2.4m。柱掘形は0.4mと他の柵に比べて大きい。

柵7 調査区北東部で検出した東西方向の柵。東西9m分を検出。柱間は1.5～3.0m。柱掘形は0.3～0.5m。

柵8 建物12南西で検出した南北方向の柵。南北4.5m分を検出。柱間は0.9～1.4m。

階段状遺構1(図18) 調査区北壁際の中央で検出した階段施設。東西約8m、南北3.7m以上の方形の掘形内に石列を検出した。石列そのものも掘形を持ち、掘形は南北幅0.5m、深さ0.2m、平面コの字形を呈する。検出時の石列は平面L字形であったが、石列掘形の形状や北東部の壁際で石が残されている事から本来はコの字型であったと思われる。石列長辺となる東西石列長は6.2m、本来は外法で7.3m、内法で5.8mであったと思われる。東西石列の石の大きさは長辺0.3m、短辺0.15～0.2m。石列中ほどの石は0.1m程の小石で並べたというよりも詰めたような状態である。石列短辺となる南北石列長は、長さ1.5m、幅0.7mを測る。南北石列は北に向かって緩やか



図18 階段状遺構1実測図(1:100)

に傾斜し、東西石列から調査区北壁際では0.25m程低くなる。またこの北壁際では東西石列と同規模の石が東西に並んでおり、本来はここから一段低い東西石列が存在したと思われる。また、掘形の南東と南西のコーナー部中位には、奥行き0.3m程の小さなテラスがあり、東西石列の北半には、上部から転落したと思われる石が上から被る事などから、この東西石列上部にも本来は石列が存在したと思われる。これらの事からこの遺構は本来は1段が0.2~0.3mの階段状で段丘上から下への昇降施設であったと思われる。3トレンチで検出した井戸3005は、このほぼ正面に位置する事から一連の施設であったと思われる。

土塁状遺構1(図19) 階段状遺構1東側で検出した。比高差0.3mの高まり。東西の検出長9.5m、基底部最大幅0.9mを測る。盛土はわずかに認められるが、基本的には段丘短部を削り残したものである。この高まり部分では柵跡が確認されているが、周辺は極端に遺構密度が低く土塁の可能性が考えられる。成立時期は不明であるが、溝2050と平行しており同時期と見られる。

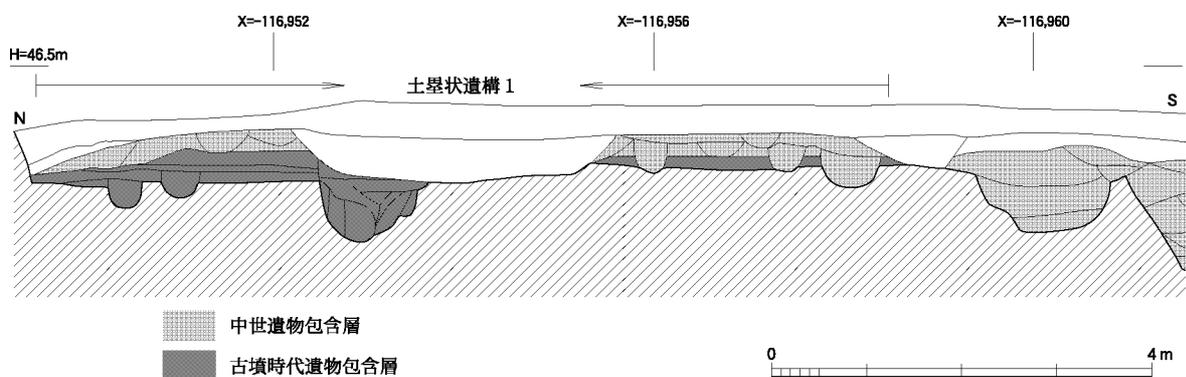


図19 土塁状遺構1断面図(1:80)

井戸2066 調査区北東部の東壁際で検出した。南北4.2m、東西1.8m以上を測る。深さは検出面より2.0m掘り下げたが、底部は確認できなかった。埋土は硬く締まる黄褐色砂泥を主とする。遺物は室町時代後半の陶磁器類が少量出土した。石組などは残されていなかったが、規模・形状から枡材を抜いた井戸跡と思われる。

井戸2244 (図20) 調査区北東部で検出した石組の井戸。掘形は2.1m×2.3mの隅丸方形。掘形の四隅には覆い屋の柱穴があり、柱間は東西が2.1m、南北が2.4m。石組は内径が1.0m、深さは4.4mを測る。石は長辺0.2~0.3m、短辺0.15m程度の石を主として用いる。石の積みは、小口面を内側に向けるものは少なく、石の長辺を内側に向けて使うものが多く、一部には縦使いするものもみられる。やや雑な印象を受ける。埋土は、検出面より2.0mまでが灰黄褐色砂泥を主とし、これ以下は青灰色粘土が主となり、共に0.2m大の石を多く含む。遺物は室町時代後半の陶磁器類が少量出土している。なお、石積みが内側に傾き危険であったため、立面図の実測は検出面から2.0mまでしか行っていない。

溝2001 調査区北西部の西壁際で検出した南北方向の溝。北に対してやや東に振る。検出長約10m、幅は北壁際で2.5m以上、深さは南端では0.2m、北壁際では0.6mを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。南端は調査区中央の東壁際で確認されているが、北は調査区外へ延び段丘崖面まで続く。3トレンチで検出した溝3003に合流すると思われる。埋土は黄褐色砂泥を主とし、粘土の堆積はみられない。瓦器・土師器皿の小片が大量に出土している。

溝2050 調査区北部で検出した溝。調査区東壁際では南北方向から西に曲がり、調査区中央を越えた付近で再び北に曲がり段丘崖面へと続く。幅0.3~0.8m、深さ0.3~0.4mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は土器類の小片が出土し、備前播鉢がある。

溝2053 調査区北東部、建物9の東側で検出した南北方向の溝で、溝2050に合流する。幅0.4m、深さ0.2m。

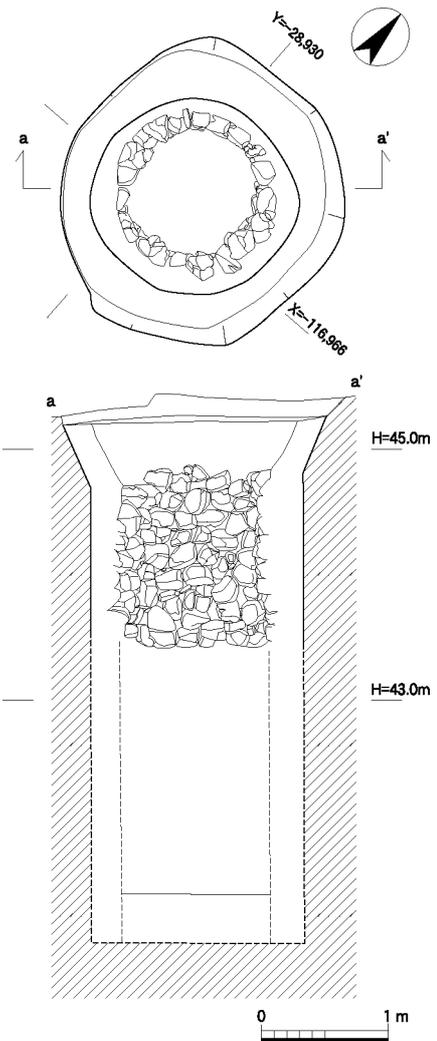


図20 井戸2244実測図(1:60)

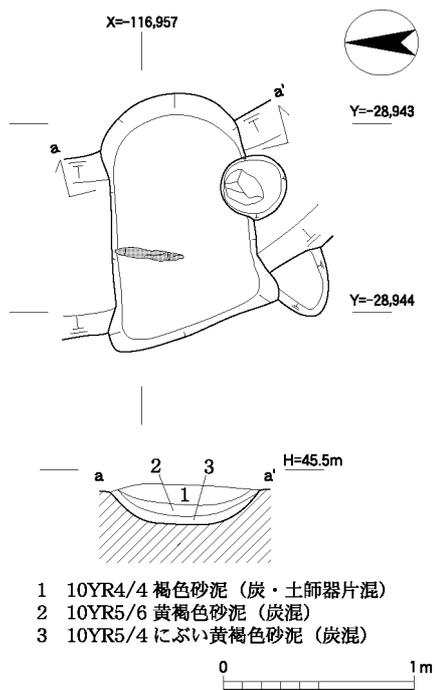


図21 土溝2015実測図(1:40)

建物9の雨落ち溝の可能性がある。

土壌2015 (図21) 調査区北西部で検出した土壌で、溝2050に切られる。1.3m × 0.8mの方形を呈し、深さ0.2mを測る。鉄製小刀が出土している。鉄製の小刀は磨滅が激しい。

土壌2078 調査区北東部で検出した土壌。3.0m × 3.0mでやや楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は炭を多量に含む灰黄褐色の砂泥層で、最下層は炭のみが5cmほど堆積する。土壌南半からは土器類が多量に出土し、北半からは径0.2mほどの石が多量に出土する。石は熱を受けたものが多い。

土壌2373 調査区のほぼ中央で検出した。近世の水溜 (土壌2376) に切られる。1.3m × 1.3mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂泥。土師器皿、瓦器などがまとめて出土した。

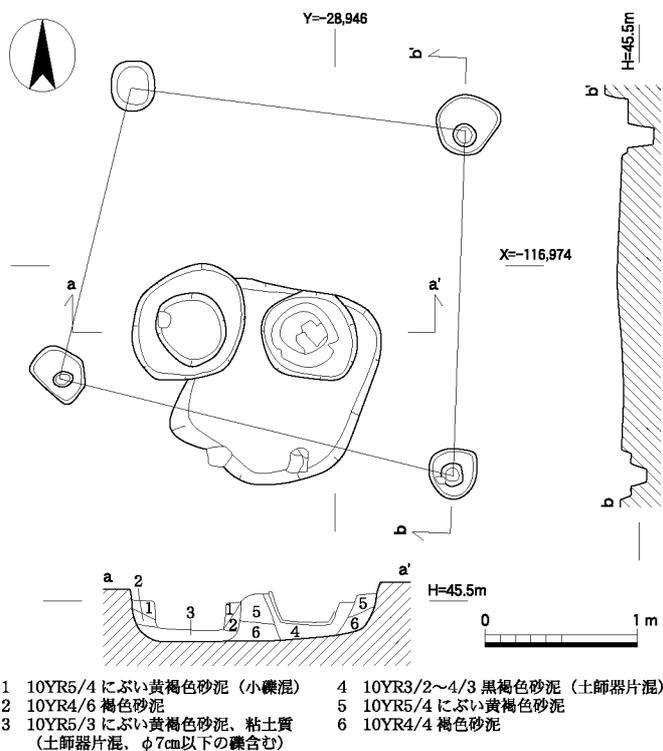
土壌2380 調査区ほぼ中央で検出した。1.2m × 1.2mの隅丸方形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂泥。土壌底部近くで土師器皿、瓦器、古瀬戸などがまとめて出土した。

土壌2438 調査区南東部で検出した。2.0m × 2.2mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黄褐色砂泥。室町時代後半の土師器皿、瓦質土器などが出土した。

3) 江戸時代の遺構 (図17)

溝2329 調査区中央で検出した。L字型を呈する。幅0.3~0.4m、深さ0.2mを測る。伊万里染付碗が出土した。溝2050と合流し方形の区画を作る。耕作に伴うものか。

土壌2384 調査区中央の南寄りで検出した。低い石組を持つ水溜。掘形は2.4mの円形を呈し、



掘形埋土は粘土質の灰褐色砂泥で、石組の底にまで入れる。深さは0.8m。石組は掘形埋土の上に0.2~0.3m × 0.1~0.2mの石を2段ほど円形に積む。遺物は、17世紀以降の陶磁器が少量出土した。同様の遺構に土壌2376・2319・2275がある。

便所遺構2754 (図22) 調査区南西部で検出した。便槽と思われる土壌が東西に並んで2基あり、東側のものには瓦質の鉢形の土器が据えられていた。西側の土壌は壁面が平滑であり、木製容器が据えられていた可能性がある。覆屋と見られる柱穴が4箇所存在し、2つの土壌はその中央にあることから同時並存と思われる。

図22 便所遺構2754実測図 (1:50)

(5) 3 トレンチ (図23 ~ 25、 図版 7 ・ 8)

1) 鎌倉時代の遺構 (図24)

井戸3005 (図23) 調査区南部の溝3003下層で検出した石組の井戸。掘形の径は約 3 m。石組は内径が0.9m、残存する深さは0.7mであるが、本来は1.5mはあったと思われる。長辺0.3~0.4 mのやや大振りの石を小口面を内側に向けて積み上げる。埋土は青灰色の粘土。13世紀代と思われる土師器皿の小片が出土している。この井戸は2 トレンチで検出した階段状遺構 1 の東西中央にあたり、位置関係や時期から対になる施設であったと思われる。

川3001 (図25) 調査区北西部で検出した自然河川。南西から北東方向に流れる。規模はX=-116,022付近に設定したセクション付近では、幅約 7 m、深さ約 2 mを測り、調査区北壁際近くでは、幅は10mを超え、深さも2.2m以上となる。埋土は、大きく 4 層に分かれ、上層は黄褐色の細砂層を主とし、善峰川の氾濫堆積物と思われ、14世紀代の遺物の小片を微量含む。中層は青灰色の粘土を主とする。下層はオリーブ色系の粗砂や小礫を主とし、最下層は青灰色の粘土を主としやや腐植質である。中層が堆積した時点で水流が無くなったと思われる。岸の傾斜は、東岸はセクションを境にして異なり、南側はかなり急でほぼ垂直となる部分もあるが、北側はやや緩やかとなり川底に至るまで 2 段落ちとなる。

西岸は全体に緩やかである。セクションより北側の東岸傾斜面では、瓦器が多量に出土しており、陸部に廃棄された瓦器が水の浸食作用によって川内に崩れ落ちたものである。東岸の傾斜面中ほどには、「ハンノキ」の根株が 3 箇所検出されている。

溝3003 調査区南部の段丘裾部で検出した東西方向の溝。幅約2.1m、深さ約0.7 mを測る。溝底は西から東に低い。溝の埋土は褐灰色の粗砂を主とする。遺物は瓦器、土師器皿などの小片が出土した。位置関係から 2 トレンチ溝2001につながる可能性もある。

土器溜3007 川3001の東側で肩部に沿うようにして検出した。土器が検出された範囲は、東西がY=-28,935 ~ -28,945、南北がX=-116,917 ~ -116,930で、特に最も土器が集中するのはX=-116,925より北側である。土器は、室町時代の遺物包含層

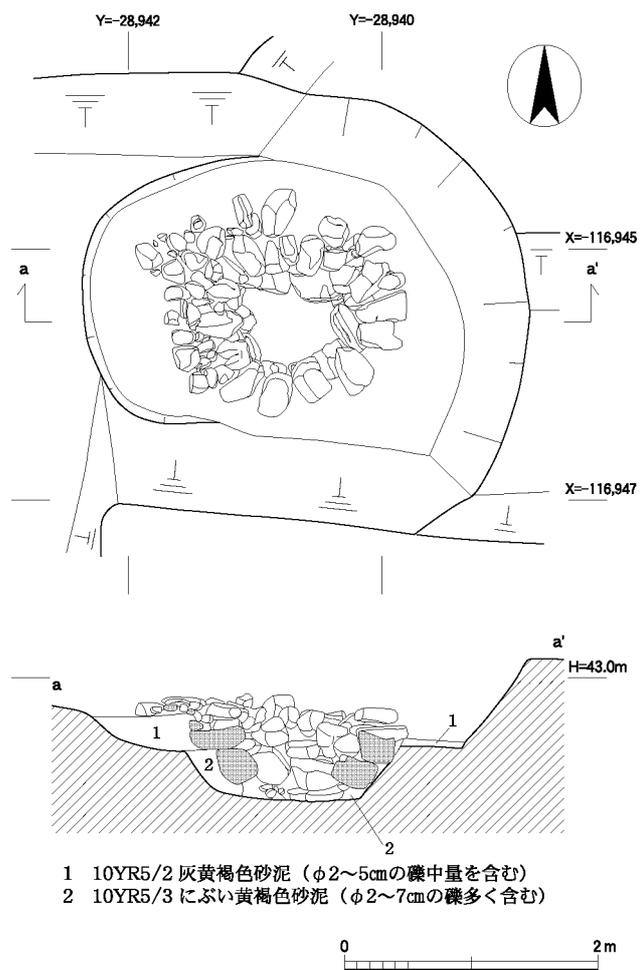


図23 井戸3005実測図 (1 : 60)

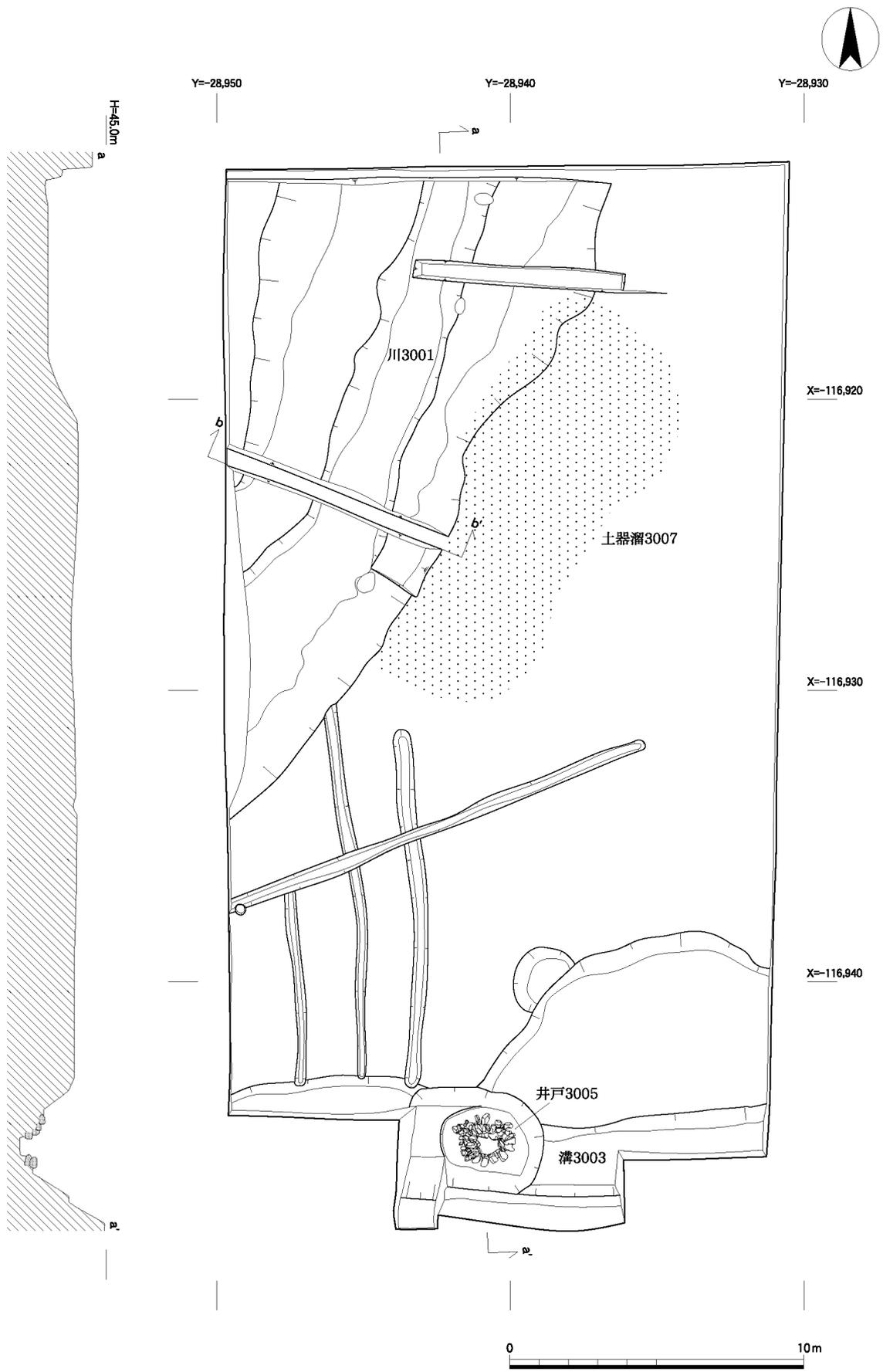
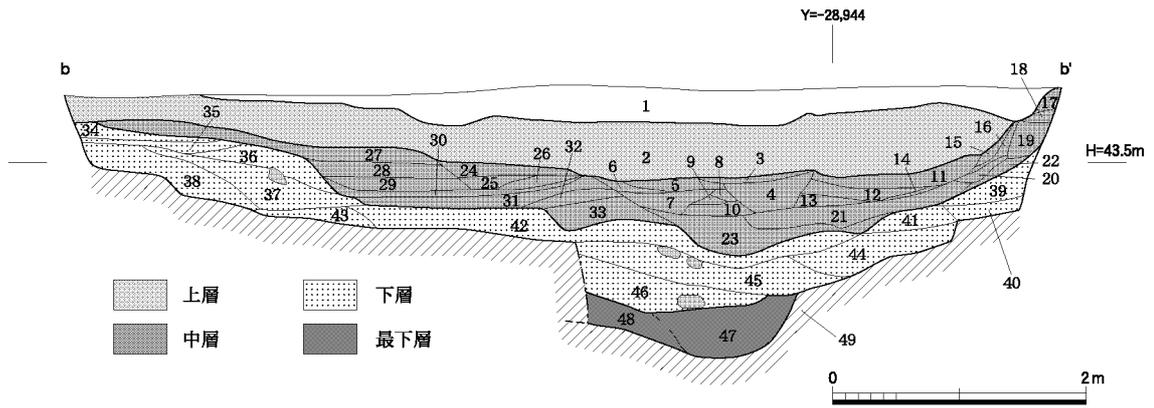


図24 3 トレンチ実測図 (1 : 200)



- | | |
|-----------------------------|--|
| 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥〔室町時代耕作土〕 | 26 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (やや粘質) |
| 2 10YR5/2 灰黄褐色細砂〔善峰川氾濫堆積土〕 | 27 7.5YR5/1 褐灰色粘土 |
| 3 10YR6/1 褐灰色粘土 | 28 10YR5/2 灰黄褐色砂礫 (粘質) |
| 4 7.5YR5/1 褐灰色粘土 | 29 7.5YR5/1 褐灰色砂泥 (やや粘質) |
| 5 2.5Y6/1 黄灰色粘土 | 30 2.5Y5/1 黄灰色粘土 |
| 6 10YR6/1 褐灰色粘土 | 31 10YR5/1 褐灰色砂泥 (やや粘質) |
| 7 10Y5/1 灰色砂泥 (木片含む) | 32 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (やや粘質、木片含む) |
| 8 10YR6/1 褐灰色粘土 | 33 10YR5/1 褐灰色砂泥 (炭少量・小礫含む) |
| 9 7.5YR4/1 褐灰色粘土 | 34 10YR4/1 褐灰色砂礫 |
| 10 10YR5/1 褐灰色粘土 | 35 10YR4/4 褐色細砂 |
| 11 10YR5/1 褐灰色粘土 (炭少量含む) | 36 10YR4/1 褐色砂礫 |
| 12 7.5YR6/1 褐灰色粘土 (炭少量含む) | 37 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| 13 10YR5/1 褐灰色粘土 (木片含む) | 38 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 |
| 14 10YR5/1 褐灰色砂泥 (やや粘質) | 39 10YR5/1 褐灰色砂礫 (φ5~12cmの礫中量含む) |
| 15 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (小礫含む) | 40 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ2~5cmの礫中量含む) |
| 16 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 41 10YR4/1 褐灰色粘土 (小礫混) |
| 17 10YR4/6 褐色砂泥 | 42 10YR4/4 褐色砂礫 (φ2~3cm) 酸化 |
| 18 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 43 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (やや粘質) |
| 19 10YR4/4 褐色砂泥 (小礫含む) | 44 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 (植物体多く含む、口縁内面段有り瓦器) |
| 20 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (やや粘質) | 45 2.5Y5/2 灰オリーブ色粗砂+礫 (φ1~5cm) |
| 21 10YR5/1 褐灰色粘土 (炭少量・木片含む) | 46 7.5YR4/4 褐色砂礫 |
| 22 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (やや粘質) | 47 10Y4/1 灰色粘土 (腐植多く含む) |
| 23 5GY5/1 オリーブ灰色砂泥 (やや粘質) | 48 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (小礫φ2~5mm) |
| 24 2.5Y5/1 黄灰色粘土 | 49 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 (φ2~5cm、φ15cmの礫多く含む) |
| 25 10YR5/1 褐灰色粘土 | |

図25 川3001東西断面図 (1 : 60)

(耕作土)直下で、掘形は無く面的に検出された。瓦器椀がほとんどであるが、土師器皿、東播系須恵器鉢、褐釉陶器壺、滑石製石鍋なども少量であるが含まれる。土器は5~10cmほどの厚さをもって堆積しており、数度にわたって廃棄されたと思われる。上面は小片が多く下層は完形のものが多いが、上面に小片が多いのは後世の耕作の影響と思われる。瓦器椀は5~10個程重ねて捨てられたものが多い。居住域の実質的な端となる段丘から15m以上離れている事、完形の瓦器椀を重ねて一括廃棄しているものが多い事などから、何らかの祭祀に使用された土器の廃棄場所であった可能性がある。ただし、一方で須恵器鉢、瓦質土器の鍋などの調理具が出土する事から、集落の日常的な廃棄場所であった可能性も否定できない。

(6) 4 トレンチ (図9・10、図版8)

近世以降の水溜あるいは肥溜と思われる土壌が多数存在しており、これ以前の純粋な土層の堆積はほとんど残されていない。これは、調査区の南側に現在も東西方向の道路が通っており、これに関連すると思われる。

註

- 1) 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981年

3. 遺物

遺物は、整理箱にして193箱が出土した。そのほとんどが平安時代末から室町時代のもので、その中で時代別に見ると鎌倉時代前半までが最も多く後半は少ない。室町時代になると再び増加し、室町時代後半になると再び減少する。17世紀前半までは若干出土するが、これ以降は国産磁器の小片が少量出土するのみである。平安時代以前の遺物では、長岡京期のものはほとんど出土せず、縄文時代から古墳時代までのものも量は少ないが出土する。

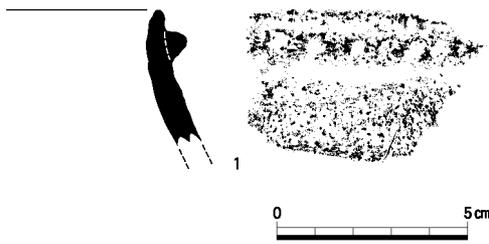


図26 縄文土器拓影・実測図(1:2)

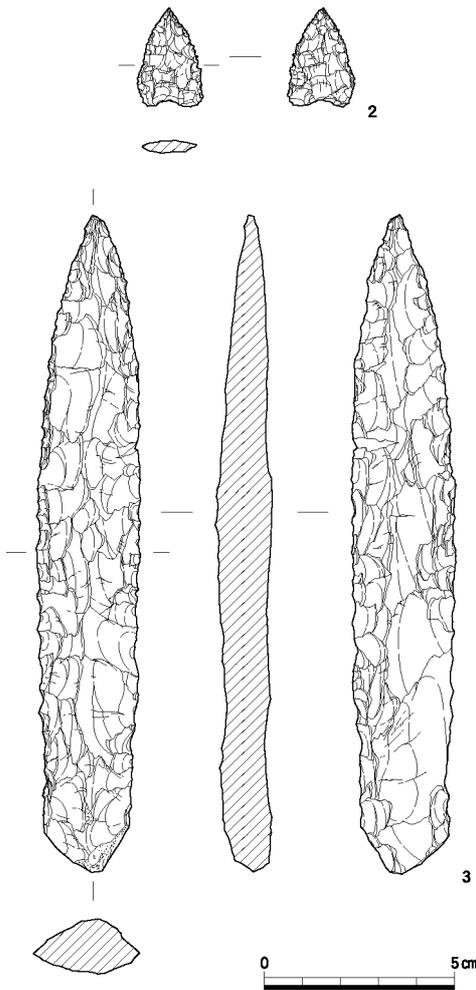


図27 石器実測図(1:2)

(1) 縄文時代から古墳時代の遺物

縄文時代(図26-1)

1は、2トレンチ土壌2926から出土の縄文時代晩期の深鉢。口縁端部に刻み目を施す。口縁端部の下に突帯を貼り付け刻み目を施す。滋賀里式。

弥生時代(図27-2・3)

2は無茎式の打製石鏃、サヌカイト製。両面を丁寧に仕上げる。3は打製石槍、サヌカイト製。2・3は共に2トレンチ第1面包含層より出土した。

古墳時代前期(図28-4~7)

4・5はいわゆる庄内式の土師器で、2トレンチ溝2808から出土した。4は器台、杯部は内外面ヘラミガキ、脚台部は外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。5は高杯、杯部は内外面ヘラミガキ、脚部は外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整、脚部の円孔は4ヶ所に穿たれる。

6・7は布留式の土師器で、1トレンチ溝1691から出土した。6は口縁部が「く」の字に屈曲する甕形土器、体部外面ハケ目、内面ヘラ削りを施す。7は短頸の広口壺、内外面に共に細かいハケ目を施すが、外面はナデによってほとんど消されている。

古墳時代後期(図29-8~10)

8~10は古墳時代の須恵器。8は2トレンチ竪穴住居2から、9・10は1トレンチ溝1700から出土した。いずれもTK10型式と思われるが、8は9

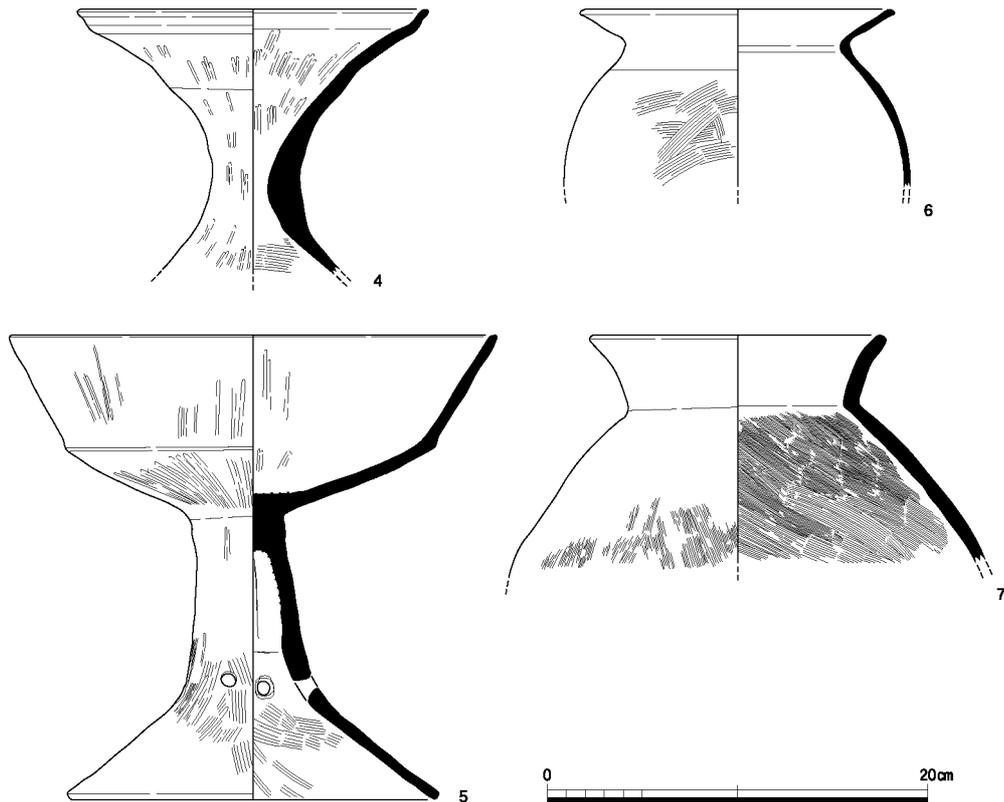


図28 溝1691・2808出土土器実測図(1:4)

よりも口縁端部の形状、口縁部の傾き、口縁と天井部の稜線のあり方など、やや古い要素が見られる。また、10は焼け歪がある。

(2) 鎌倉時代から室町時代の遺物

土器溜3007出土土器(図30-11~59、図31-60~62)

土器溜3007からは大量の土器類が出土した。土器の破片数は計測していないが遺物整理箱にして約80箱が出土している。そのほとんどは瓦器碗である。皿類は瓦器よりも土師器が多い。煮沸具では瓦質土器の鍋・釜類が少量出土している。国産陶器では東播系の須恵器こね鉢・甕の他に十瓶山窯産、備前の甕などがみられる。貿易陶磁器では褐釉陶器壺の他、青磁・白磁の碗類が少量出土する。

11~26は土師器小皿。口径8~8.5cm。色調は褐色が強く、胎土にチャート共に0.5mm大の赤色粒子を多く含むのが特徴的である。27~29は土師器大皿。28は26・27に比べるとナデが強く口縁端部にも明瞭なナデを残す2段ナデ調整である。色調・胎土は26・27が小皿と同じ、28は灰白色を呈し砂粒をほとんど含まない精良な胎土を持つ。30~38は瓦器皿。口径9~10cm。内面底部にはジグザグ状の暗文を施す。39~49は瓦器碗。口径13.5~15.0cm、器高4.5~5.0cmを測る。体部外面にヘラ磨きは認められない。見込み暗文は螺旋状に描くものが多いが、46は円を描くのみである。50は瓦質土器鍋。51は瓦質土器釜。52~57は貿易陶磁器。52は白磁類碗、53は白磁

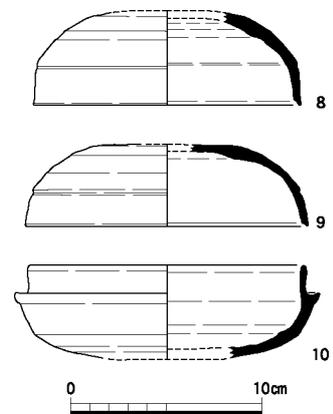


図29 竪穴住居2、溝1700出土土器実測図(1:4)

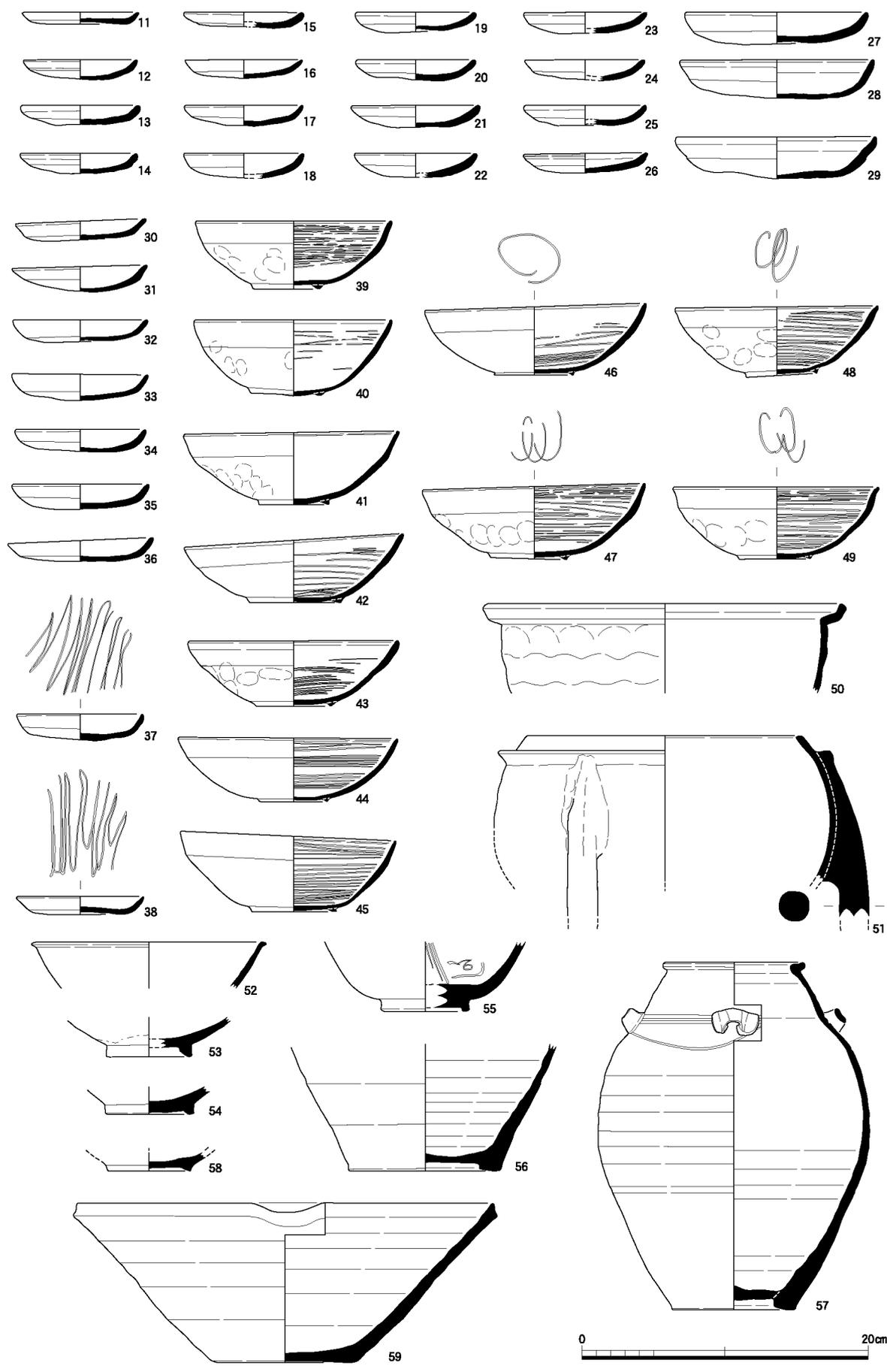


图30 土器溜3007出土土器实测图(1:4)

類椀底部、54は白磁 類椀底部、55は龍泉窯系青磁椀で内面に劃花文を施す。56は褐釉陶器壺底部。57は褐釉陶器四耳壺、耳の下に一条のヘラ書き沈線を施す。58は山茶椀底部、底部外面は糸切痕が残り、小さな高台が付く。59は東播系須恵器こね鉢。60は東播系須恵器甕。61は外面平行タタキを施す中世須恵器、十瓶山窯産と思われる。62はやや大型の瓶、焼成は硬質で色調は青灰色を呈する。内外面共に丁寧なナデを施し成形痕は残らない。備前と思われる。

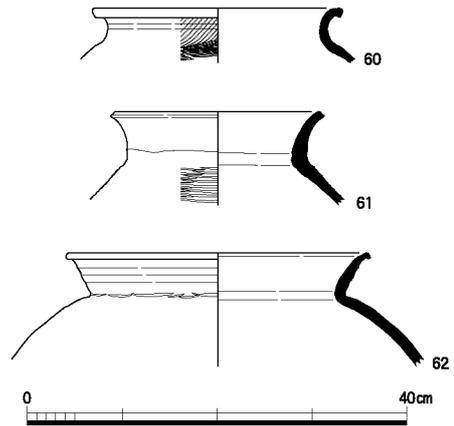


図31 土器溜3007出土土器実測図
(1:8)

土壙2078出土土器(図32 - 63~125、図33 - 126~129)

土壙2078からは破片数で約1000点の土器片が出土した。土師器皿が185点、瓦器椀が466点、瓦器皿が55点、煮沸具が167点、須恵器鉢が2点、須恵器甕が91点、国産陶器が20点、貿易陶磁器が22点である。貿易陶磁器のほとんどは壺類で椀皿類は極めて少ない。

63~80は土師器小皿。口径8cm前後のものと9cm前後のものがある。口縁部の立ち上がりは、63~66は緩やかであるが、67~80は強く立ち上がる。特に98・99は平坦な底部から垂直近くに立ち上がり、形態は瓦器の皿に近い。また、75~80は焼成時に内外面共に黒化している。胎土はいずれも雲母、長石が認められる。81~90は土師器大皿。81~83は底部から口縁部が外反気味に立ち上がる。84~90は底部から口縁部が直行気味に立ち上がり、胎土にチャート共に0.5mm大の赤色粒子を多く含むのが特徴的である。91~108は瓦器皿。口径は8~9cmのものがある。見込みの暗文は磨滅のため認識できない。109は瓦器小型杯。110~117は瓦器椀。法量からみると2つに分かれる。110・111は口径12cm前後、器高4cm前後、112~117は口径14~15cm、器高5cm前

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器	4箱	縄文土器1点	2箱	0箱
弥生時代	石槍、石鏃		石槍1点、石鏃1点		
古墳時代	土師器、須恵器		土師器4点、須恵器3点		
長岡京期	須恵器				
鎌倉時代 ~室町時代	土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、国産陶器、貿易陶磁器、滑石製品、木製品、鉄製品	188箱	土師器102点、土師質土器1点、瓦器82点、瓦質土器4点、東播系須恵器6点、国産陶器9点、貿易陶磁器14点、滑石製品2点	174箱	0箱
江戸時代	瓦質土器、国産陶磁器	1箱		1箱	0箱
合計		193箱	230点(16箱)	177箱	0箱

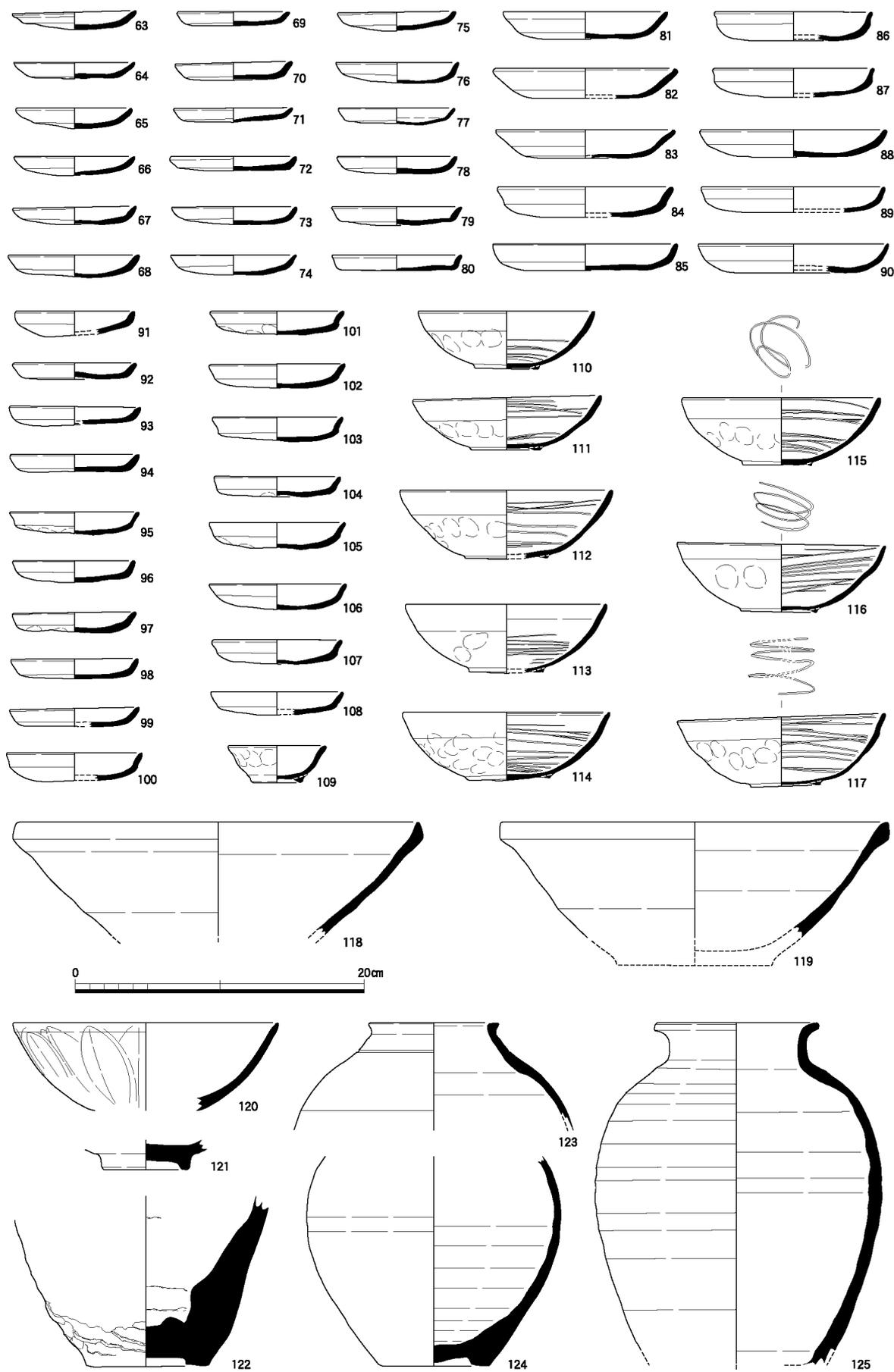


图32 土壤2078出土土器实测图(1:4)

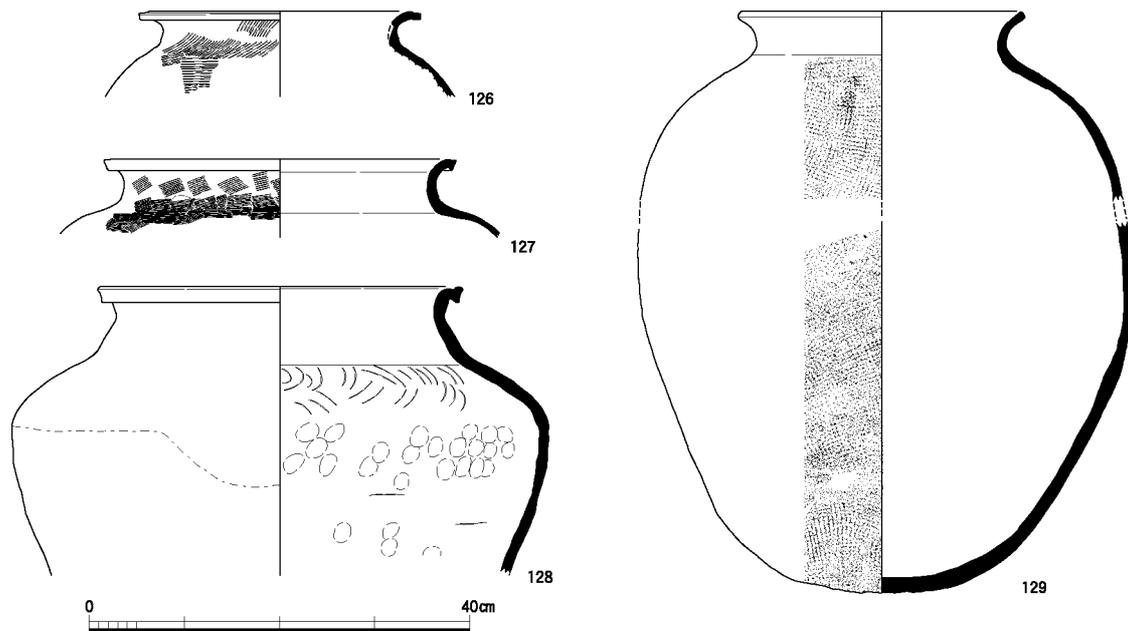


図33 土壙2078出土土器実測図（1：8）

後であるが、後者のほうが圧倒的多数である。118・119は東播系須恵器こね鉢。120は龍泉窯系青磁鎬連弁椀、121はその底部。122～124は中国産褐釉陶器壺、122は焼成時の火膨れが顕著に認められ器表面の一部は剥離している。125は薄い透明釉を施釉した須恵質陶器壺、国産と思われるが産地不明。126・127は東播系須恵器甕、焼成は軟質。128は常滑甕。129は外面格子タタキを施す中世須恵器甕、亀山窯産と思われる。

土壙1668出土土器（図34 - 130～140）

130は土師器小皿。131～134は瓦器皿、口径はいずれも9cm、内面暗文はジグザグ状に描く。135～140は瓦器椀。口径13～15.5cm、器高は4～5cm。体部外面にはヘラ磨きを施さない。見込み暗文は螺旋状に描く。

土壙1693出土土器（図34 - 141～157）

141～149は土師器小皿。口径は8cm前後にまとまる。150・151は土師器大皿。152～155は瓦器皿、口径はいずれも9cm。156・157は瓦器椀、いずれも口径14.5cm、器高5.1cmを測る。

階段状遺構1埋土出土土器（図34 - 158～161）

階段状遺構1の埋土から出土した土器には、瓦器、土師器皿、瓦質土器などが出土しており、遺構の廃絶時期を表すものである。小片が多くいずれも器壁が磨滅しており、図化できるものは少ない。158～161は瓦器椀、高台を持つ159・161と持たない158・160がある。

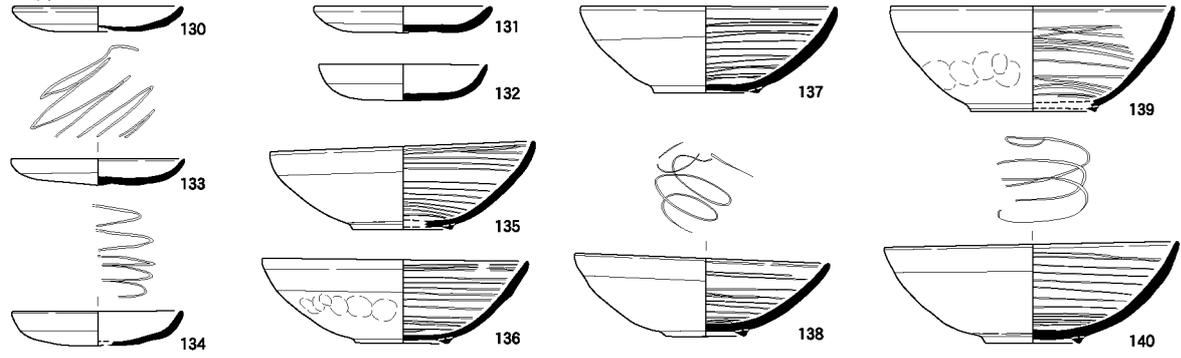
土壙2373出土土器（図34 - 162～165）

162は土師質土器の椀。形態は瓦器に近く或いは瓦器の焼成不良である可能性もある。163～165は瓦器椀。口径はいずれも12.5cm。外面底部は平坦で高台は持たない。器壁が磨滅しており内面のヘラ磨きは164以外に確認できない。

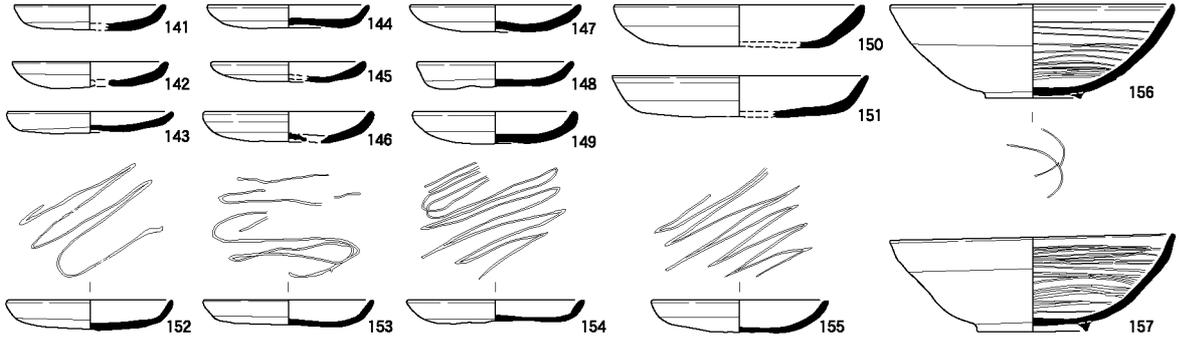
土壙2380出土土器（図34 - 166～185）

土器類が破片数にして993点出土している。土師器皿は褐色系が648点、白色系が33点、瓦器椀

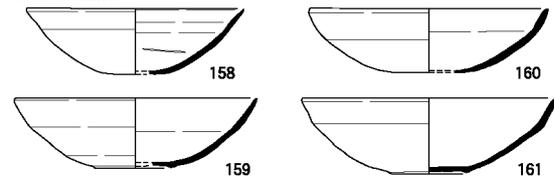
土壤1668



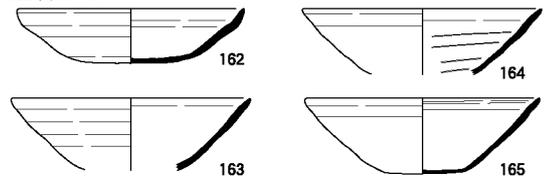
土壤1693



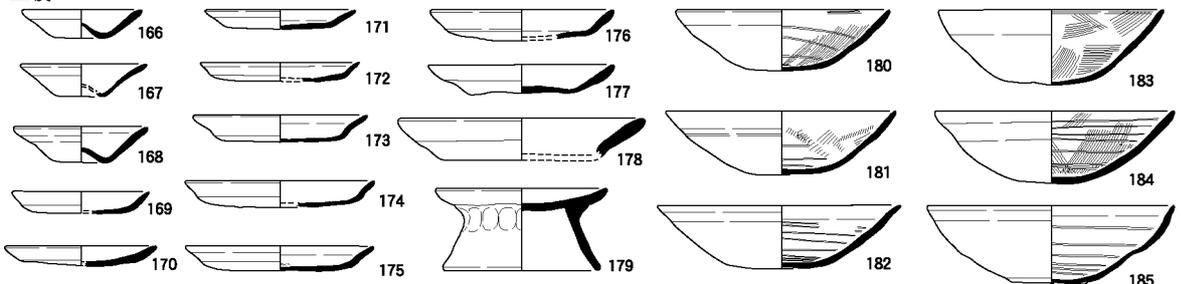
階段状遺構 1



土壤2373



土壤2380



溝2001

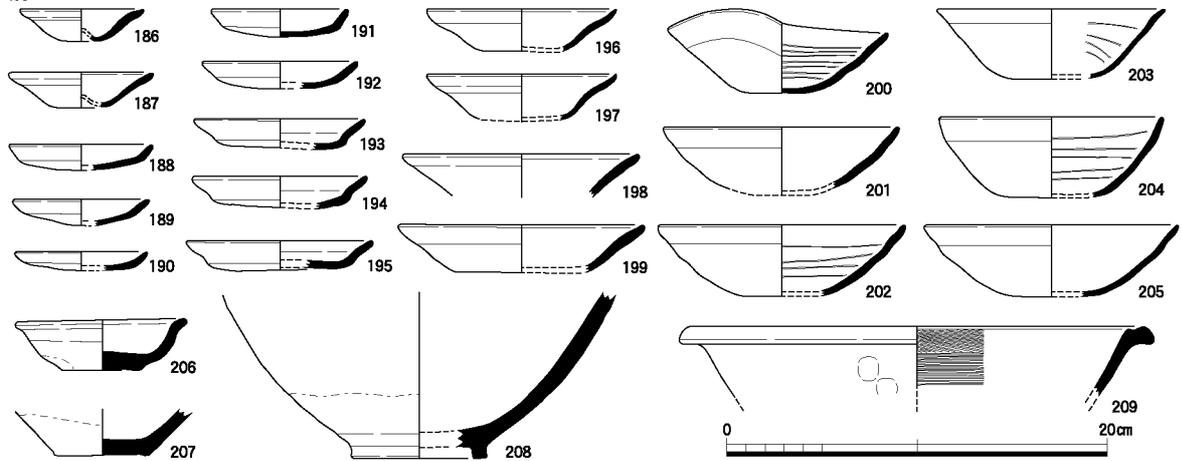


图34 土壤1668·1693·2373·2380、溝2001、階段状遺構 1 出土土器実測图(1:4)

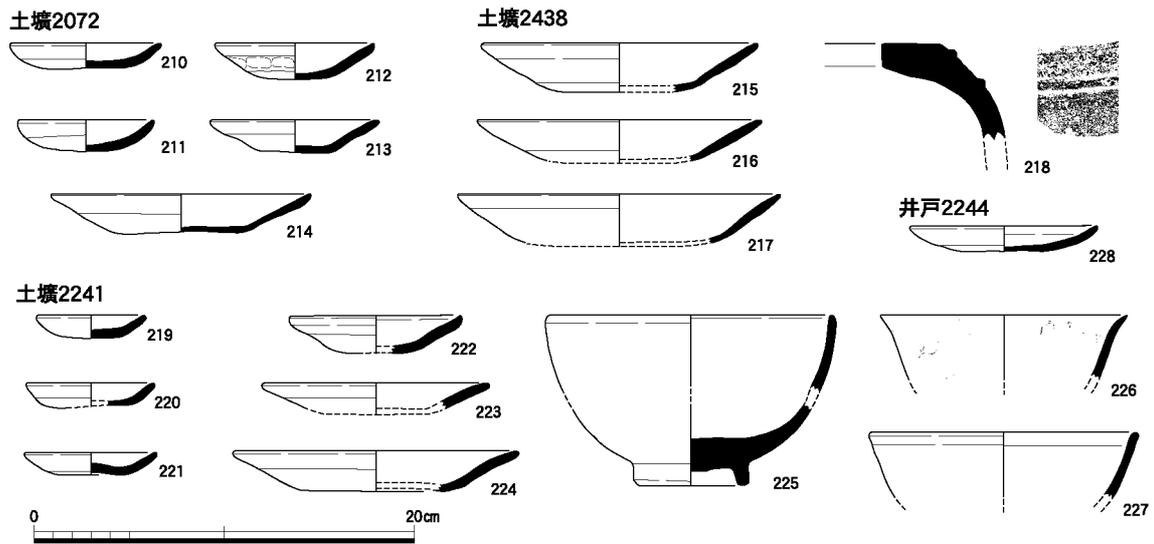


図35 土壌2072・2438・2241、井戸2244出土土器実測図（1：4）

が295点、瓦質土器の鍋が16点、古瀬戸柄付片口の柄の部分が1点出土している。瓦器皿は確認できない。白色系の皿は小片のため図化していないが大皿も出土している。瓦器椀は径口指数から0.3～0.33のものと0.27前後の浅いものに分かれる。これ以前の瓦器椀が0.3以下のものはなく、法量分化している可能性もある。出土状況から土器の一括性は高いと思われる。

166～179は土師器皿、形態と法量から3群に分かれる。166～168は白色系のへそ皿。口径6.5～7.0cm。器壁は薄く中央は強く凹む。169～172は小皿。口径7.0～8.5cm。口縁は緩やかに外反しながら低く立ち上がる。173～176は9～10cmとやや大きい。体部のナデは強く口縁部はやや屈曲して外反する。177も口縁部のナデが強く外反するが立ち上がりが高く、器壁が厚い。178も177に形態が似るが、口径が大きく器壁が厚いのが特徴である。179は脚付きの皿。土師器皿の胎土は169～179はすべて同じで胎土にチャート共に0.5mm大の赤色粒子を多く含む。180～185は瓦器椀。いずれも高台を持たない。口径11.0～13.0cm、器高3～4cm。180～182は口径に対して器高が低く、径口指数0.27前後である。椀というよりも杯に近い。183～185は口径指数0.3前後である。内面は荒いヘラミガキを施し、ハケ目調整の痕跡が残るものがある。見込みにはいずれもジグザグ状の暗文が残る。

溝2001出土土器（図34 - 186～209）

186～199は土師器皿。色調で分けると186・188～197は褐色系、187・198・199は白色系に分かれる。褐色系の胎土にはチャート共に0.5mm大の赤色粒子を多く含む。また、口径と法量からは5群に分かれる。186・187はへそ皿、186は187に比べると器壁が厚く、体部のナデも弱い。188～192は口径7～8cm、器高1～1.5cmを測り、体部は緩やかに外反し立ち上がりは低い。193～195は口径8.5～9.5cm、器高1.5cmを測り、体部に強いナデを施し屈曲させる。196・197は口径9.8cm、器高2.3cmを測り、体部に強いナデを施し屈曲させる。198・199は口径12.0～12.5cm、器高2.4～2.5cmを測り、体部に強いナデを施し屈曲させるのは196・197と同じであるがナデはやや弱い。200～205は瓦器椀。口径12.5～13.0cmを測る。206～208は古瀬戸陶器、いずれも灰釉を

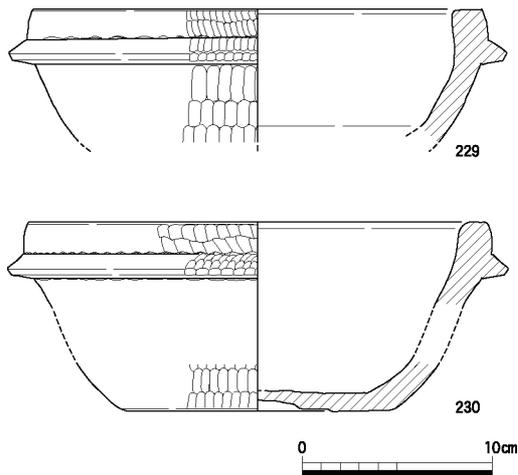


図36 土器溜3007出土石製品実測図（1：4）

土壙2241出土土器（図35 - 219～227）

219～224は土師器皿。225～227貿易陶磁器。225・227は青磁椀、225は高台内面無施釉。226は染付椀。

井戸2244出土土器（図35 - 228）

井戸2244から出土した土器は少なく、228の土師器皿以外に大窯期とみられる天目椀の小片が出土している。

土器溜3007出土石製品（図36 - 229・230）

229・230は滑石製石鍋。口径23～24cm、やや小型のもので、底径が口径に比べて小さい。

施釉。206は小皿、底部に糸切痕が残る。207は平椀、底部に糸切痕が残る。209は瓦質土器の鍋。

土壙2072出土土器（図35 - 210～214）

210～213は土師器小皿。210・211の体部は緩やかに外反しながら立ち上がる。212・213は体部に強いナデを施し屈曲させる。214は土師器皿。

土壙2438出土土器（図35 - 215～218）

215～217は土師器皿。内面底部の凹状圈線が認められる。色調は白橙色。218は浅鉢形の瓦質土器、体部外面に2条の突帯を巡らし、その間にスタンプで花菱文を施す。

4.まとめ

(1)長岡京期の遺構の有無について

今回の調査では、明確な長岡京期の遺構は検出されなかった。遺存良好な中世の遺構面と、その下層において古墳時代後期の遺構面を検出しており、後世の削平はそれほど大きくないと思われる。一条条間大路北側溝推定地では、南北棟の掘立柱建物が検出された。すでに述べたように、これが長岡京期の遺構の可能性はある。いずれにしても、調査地では一条条間大路は存在しないことになる。今回の調査の南側で行われた右京746次調査(2002年度調査)では一条条間南小路が、さらにその南側では一条大路南側溝が検出されている。地形的には、これらの地点よりも今調査地は標高も若干高く、段丘上の安定した場所にある。これまでの長岡京の調査では、丘陵が迫り地形が複雑な長岡京右京は、条坊遺構は左京に比べて全面的には検出されておらず、条坊遺構が多く検出されるのは右京三坊あたりまでであり、それより西側にはあまり認められない¹⁾。都城の条坊道路は当然交通路としての機能も持つが、天皇を頂点とする律令官人の宅地班給の為の区画を形作る役割が大きい²⁾。長岡京の中で宅地として利用される事の少ない、右京四坊では、条坊遺構が検出されない事よりも、検出される地点でのそれぞれの意味を考慮する必要があるのかもしれない。

(2)中世の遺構の変遷について

今回の調査で検出した主な遺構は、鎌倉時代から室町時代の柱穴であり、合計1500基以上を検出した。集落内で継続して宅地としての利用されていたことわかる。以下に建物を中心に遺構の変遷をまとめてみたい。

1期(12世紀末から13世紀前半)

集落の形成時期である。1トレンチでは土壌、柱穴などを検出しており、宅地としての利用は存在したと思われる。遺構数が少ないのは後世の削平による。2トレンチでは掘立柱建物と共に段丘際で階段状遺構1、土壌2015など、3トレンチでは自然河川3001とその右岸に大量廃棄された土器溜3007、井戸などを検出した。この時期の遺構の傾きは、ほぼ正方位である。今回の調査地の南側で行われた右京746次調査で検出されたこの時期の掘立柱建物も、ほぼ正方位である。この時の調査では、集落の南限となる掘立柱塀を検出している。今回の調査によって集落の北限は段丘崖面である事が明らかとなっており、これによって13世紀の集落の南北長は約140mとなる。

階段状遺構1は、管見の限り、他に類例を見ない遺構である。階段ステップとなる石列には掘形がほとんど無く、裏込も無い事など、石積みとして古い要素を持っている。段丘下の3トレンチで検出した井戸3005は、ほぼその正面に位置する。氾濫源に井戸を作れば、浅い掘削深度によって水を得る事ができる。今回の調査で、段丘上に井戸が確認されるのは、室町時代後半の井戸2244が最も古い例である。遺構面から井戸底までの深さ4.4mと深い。因みに井戸3005の井戸底

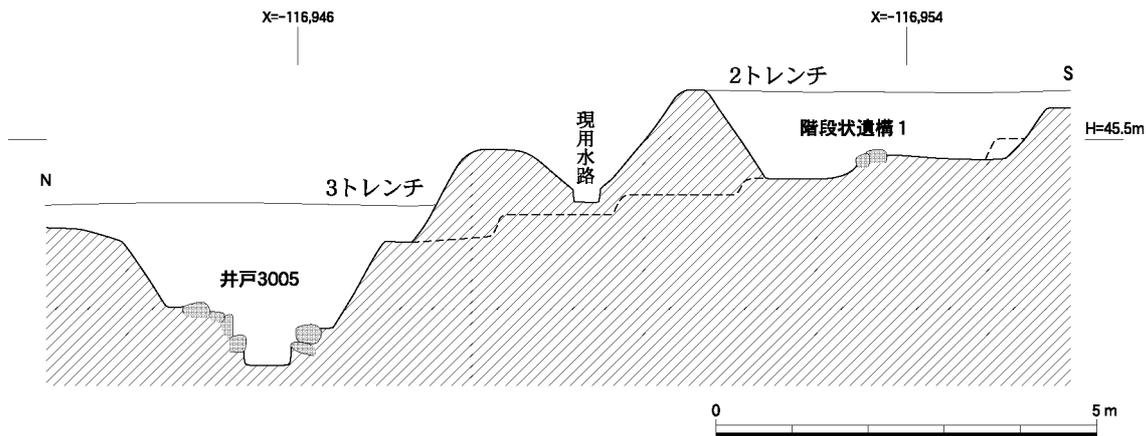


図37 井戸3005から階段状遺構1実測図(1:100)

の標高は42.0m、井戸2244の井戸底の標高は41.1mである。このように階段の機能の一つとして、段丘上の居住域から段丘下に作られた井戸への昇降施設として考える事ができる。しかし、この為だけに作られたとすれば、東西幅5.5mと規模がやや大きい。階段の規模からすると、一度に大人数の利用を考えたものと思われる。3トレンチでは建物跡などの遺構は検出されなかったが、大量に廃棄された土器溜3007の存在を考えあわせれば、3トレンチ部分の何らかの空間利用も存在したと思われる。

3トレンチの土器溜3007と2トレンチ土壙2078からは、共に大量の土器が出土した。瓦器碗の型式からみると、森島編年のそれぞれ - 1期と - 2期にあたる³⁾。出土した土器類には瓦器の他、土師器、東海の山茶碗、東播系須恵器、讃岐の瓶山窯産陶器、備前、貿易陶磁器の青磁・白磁・褐釉陶器など多種多様なものが出土している。このような例は、量的にも質的にもこの時期、平安京を除けば京都府下では大内城など少数の例しかない。この事は階段施設の存在とあわせて、調査地が集落の一般構成員の居住空間ではない事を窺わせ、在地領主の居館の一部である可能性が高い。

2期(14世紀後半から15世紀初頭)

2トレンチの建物群が北に対して西に傾く時期である。この段階では、階段状遺構は埋められ、段丘際では土壘状の高まりが構築される。土壘の南裾部には溝2050があり、排水溝として機能したものであろう。また、2トレンチ北西部では、幅の広い溝2001が設けられる。建物は北に対して西へ8°~10°傾く建物7・8の時期と、西へ13°傾く建物9・10・11の時期に細分される。前後関係は明らかではないが、溝2050によって区画が明確化する建物9・10・11の時期を、後出段階としておきたい。この傾きは、調査地の東側に残る石見城跡の東西方向の濠・土壘に近く、石見城の北外郭ラインとなる段丘地形に規制されたものと考えられる。この段階において、同じ方位を持つ地割や建物群がこの周辺に存在した事になる。現在残る土壘や濠そのものの構築年代は別としても、石見城成立の時期を示唆するものといえる。

建物8の南側には、土壙2373・2380などの土器がまとまって出土する土壘がいくつか集中してある。この場所が一定期間、廃棄土壘が設けられる空間であった事が分かる。また、溝2001から

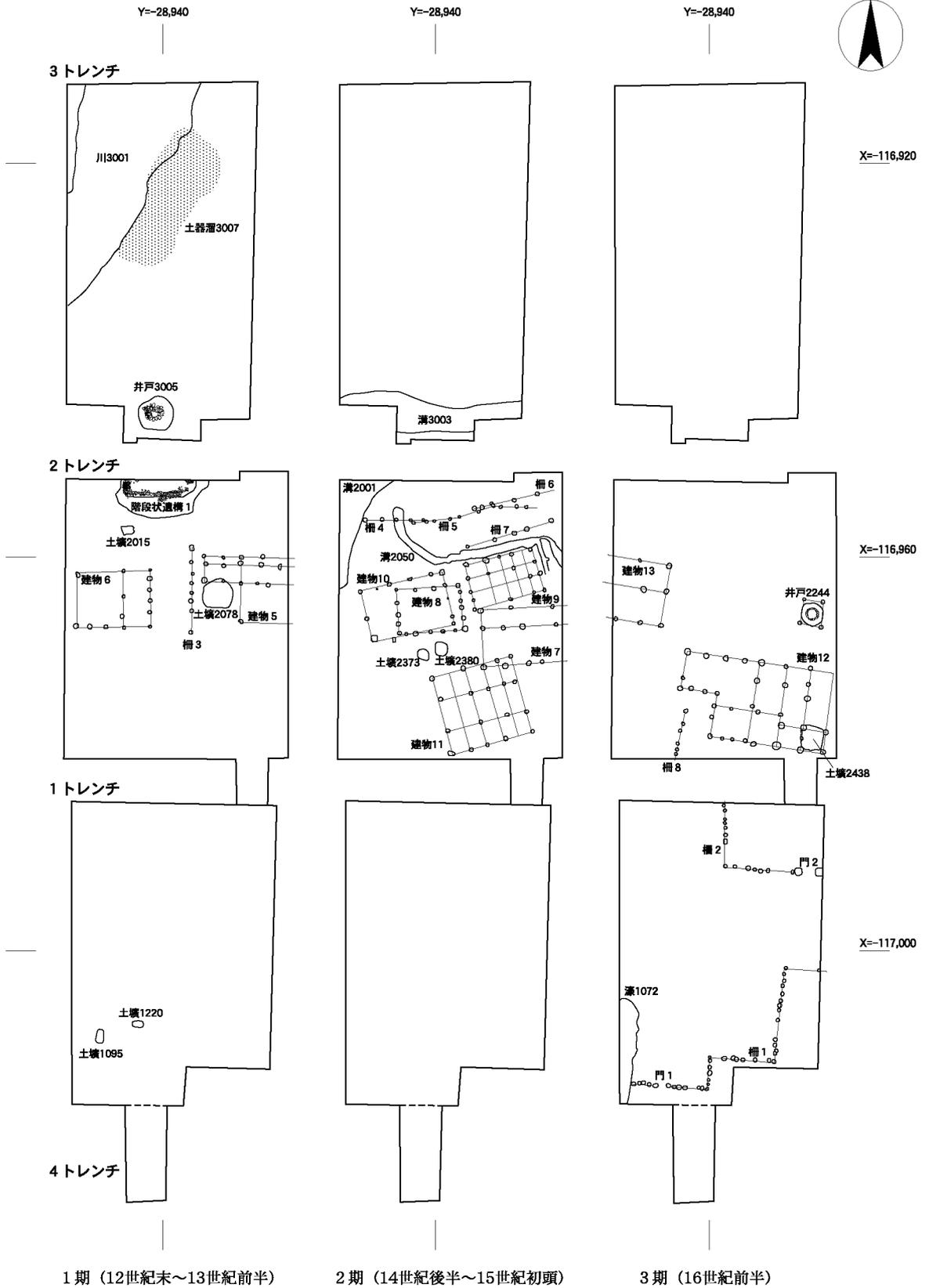


図38 遺構変遷模式図 (1 : 600)

も小片ではあるが瓦器や土師器皿、古瀬戸などが多量に出土している。これらの遺構から出土する土師器皿には、中世京都の都市遺跡から出土するものに極めてよく似たものがある。溝2001や土壇2380から出土した白色系のヘソ皿や大皿は、京都の土師器皿編年の 1 期に比定でき、実年代では1360～1440年を与えられている。一方、今回出土した樟葉形瓦器椀の終焉は、14世紀中頃とされている⁴⁾。このような年代観の異なる遺物の供伴例の同時期のものとしては、長岡京右京第566次調査のSE01の例があり、ここでも高台のない樟葉形瓦器椀と、14世紀後半から15世紀初頭の京都系の皿、古瀬戸の陶磁器などが出土している⁵⁾。このような出土例が複数調査、複数遺構で存在する事は、単に遺物の混入と考えるべきではなく、それぞれの土器の年代観を再考する必要があるように思える。ここでは、土師器皿と共に古瀬戸などが出土する事から、2期の年代を14世紀後半から15世紀初頭としておく。

3期(16世紀前半)

建物群が北に対して東に傾き、段丘上に石組の井戸が構築される。井戸2244も大窯期の天目椀が出土する。また、建物は土壇2438の上に柱穴が成立する。出土する土師器は16世紀前半と考えられ、3期もこの頃を中心とすると思われる。建物の南側では門2があり、屋敷地の南門となっている。また、1トレンチでは濠1072と門1が確認されており、この南側にも屋敷地が存在した事が分かる。この時期以降、2トレンチでは建物遺構が確認されなくなり、耕作地へと変化すると思われる。1トレンチ南部で江戸時代の土間、カマドを伴う建物3を検出している事から、近世になって村落内の居住域に変化があったことが分かる。

以上、述べてきたように今回の調査地は、ほぼ、中世を通じて遺構・遺物が検出された。

最後に調査地の東側に残る石見城跡について若干述べておく。石見城は『野田泰忠軍忠状』に文明元年(1469)七月一六日「西岡御敵之在所上里・石見・井内館令放火」と記されている。石見城は現在竹林の中に残されており、比高差約1mの土塁と堀が残されている。土塁は堀の両側にある。内側の南北方向の土塁は、現在の民家との敷地境となる南から北へ25m延びて行き、そこから西に突き出すように屈曲しており、いわゆる横矢掛けを呈している。西側に突き出した土塁は、再び東に曲がり18m程延びて終わる。外側の土塁は、南北方向に一部と北西コーナー部にも段丘に沿うようにして東に延びて行き、濠の排水口を超えても残る。濠は内側の土塁と沿うようにして屈曲しながらあり、土塁の途切れる地点で北に曲がり段丘下へと注ぐ。注ぎ口となる排水口は狭くなるのが特徴的である。このように技巧を凝らした西面と北面に対して、東面はなんら構築物が残されていない。これは、後世の土地改変の影響か、当初から存在しなかったのかは現在のところ不明である。横矢掛け状の屈曲する土塁は、現在の所、山科本願寺がその最古の例とされている。平地城館の例としては、長岡京市今里で16世紀中頃に埋没した幅5～7m、深さ約1mの凸状に屈曲した濠が検出されている⁶⁾。このように良好な状態で残されている平地城館は、京都府下でもほとんど例がない。現在の石見は、乙訓地域でもそれほど大きな集落ではないが、今回の調査成果とあわせて、その意義を今後より考えていく必要がある⁷⁾。

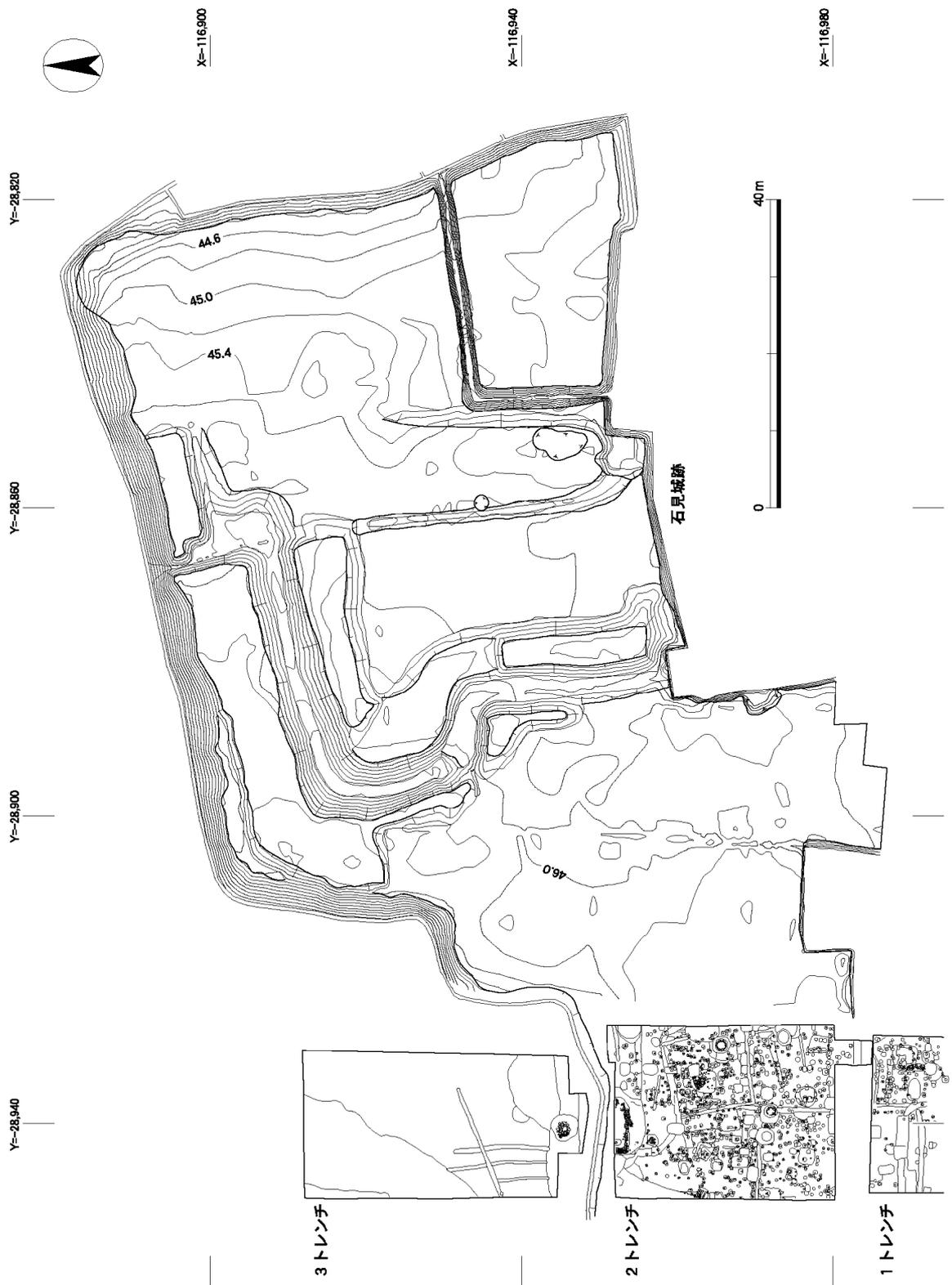


図39 調査区および石見城地形測量図 (1 : 800)

註

- 1) 岩松 保「長岡京の完成度」『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書 第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- 2) 北村優季『平安京』古代史研究選書 吉川弘文館 1995年
- 3) 森島康雄「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
- 4) 森島康雄「畿内産瓦器椀の平行関係と暦年代」『大和の中世土器』大和古中近研究会 1992年
- 5) 「長岡京右京第7ANKNZ-9地区調査概要 長岡京右京六条三坊一町、開田城ノ内遺跡」『長岡京市文化財調査報告書 第38冊』長岡京市教育委員会 1998年
- 6) 「長岡京右京356次(7ANMSI-12地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1991年
- 7) 石見城跡測量に際しては、土地所有者である三浦敏嗣氏の御協力を賜った。記して謝意を表す。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょういちじょうしぼうじゅうごちょうあと							
書名	長岡京右京一条四坊十五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-15							
編著者名	南 孝雄・清藤玲子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょううきょう 長岡京右京 いちじょうしぼう 一条四坊 じゅうごちょうあと 十五町跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのいわみちょう 大原野石見町 314番地ほか	26100		34度 56分 43秒	135度 40分 59秒	2004年11月 19日～2005 年2月9日	1,943㎡	道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京右京 一条四坊 十五町跡	都城跡	縄文時代	土壌	縄文土器	中世居館の一部の 土塁、掘立柱建物 などを検出した。			
		弥生時代		石槍・石鏃				
		古墳時代	建物・竪穴住居・ 溝	土師器・須恵器				
		長岡京期	建物	須恵器				
		鎌倉時代 ～室町時代	建物・門・柵・溝・ 階段状遺構・土壌・ 土塁状遺構・井戸・ 濠	土師器・土師質土器・ 瓦器・瓦質土器・東播 系須恵器・国産陶器・ 貿易陶磁器・滑石製品 ・木製品・鉄製品				
江戸時代	建物・溝・カマド・ 土間・土壌・便所 遺構	瓦質土器・国産陶磁器						

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-15

長岡京右京一条四坊十五町跡

発行日 2005年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961